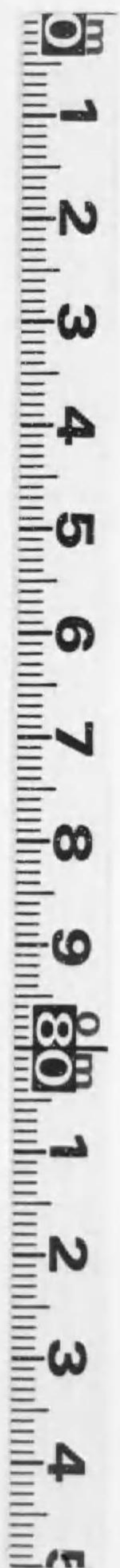


500
28



始



AN 725

3-2187

500-28



作スニラフ・ルータア
譯歌挽永福



大正
10 11.21
内交

はしがき

『蜜蜂姫』は佛蘭西の文豪アナトール・フランスの作です。著者がどういふ目的でこの童話を書いたかは、第一章をお読みになると分ります。

『學校』以下の短い話は著者が『町の子供と田舎の子供の生活』と題して集めた童話集の中から選んだものです。

大正十年十月

譯者

目次

勇	ローシャアの馬	村の子供	紫陽花	學校	蜜蜂姫
氣
一六	一六	一四	一五〇	一四	一

牧場の花……………一五

スザンヌの智慧……………一六

晝家……………一七

犬と小娘……………一八

蜜 蜂 姫



昔クテラード公國と呼ばれた土地は、今海の底になつてゐます。町や城は痕形も残つて居りません。しかし、和ぎの日には、周界一哩ほどの海の底に太い幹の樹木が立つてゐるのが見えると云ふ事です。現今海岸の税關官吏の事務室になつてゐる所は今でも『洋服屋の小舎』と呼ばれてゐますが、この物語の中に出て来るジャン親方はきつとこの名前を覚えてゐる事です。年々陸地を侵食してゐる海は、やがてはこの變な名前の場所をも蔽うてしまふ事です。

およそ世の中のものすべての事はこんな風に變化するものです。何百年何千年と年の経つうちに、山は海の底になり、海はそれと反對に高くなつて、貝殻や珊瑚が雲や氷のある山の上に運ばれて行くのです。

すべての物が變化します。陸地や海の表面は断えず遷り變つて行くのです。たい吾々は傳説によつて何百年も何千年も経つた昔の事を思ひ出し、もう消えて無くなつた事を眼の前に思ひ浮べるのです。私はクラリードのお話をして、讀者諸君を古い時代へ連れて行きたいと思ひます。

「ブランドシュランド伯爵の奥方は、眞珠を刺繡した小さな黒の頭巾を金髪
の頭に冠り……」

私はかういふ風にお話を始めます。

しかし、お話を始める前に、私は生眞面目な人にはこの話を讀んで貰ひたくないといふ事を云つて置かねばなりません。このお話はさういふ人のために書いたのではないのです。このお話は、小さな事を輕蔑して、

いつも何か教訓を得たいと思つてゐる眞面目な人のために書いたのではないのです。私は、これを讀んで樂みたいと思ふ人、心が若くて快活な人にのみこの話をさしあげるのです。無邪氣に樂む人だけがこのお話を終ひまで讀むでせう、さういふ人たちが若し子供を持つて居られるならば、私は「蜜蜂姫」の話をして貰ひたいと思ひます。私はこの物語によつて男の兒や女の兒を喜ばしたいと思ふのですが、きつと喜ばせる事が出来る、と言ひ切る勇氣がありません。この話は彼等にはあまりに詰らないのです。全く、舊式の子供にしか向かない話なのです。私の隣家に九歳になるきれいな女の兒がゐますが、この間その兒の本棚を調べて見ました。そこには顕微鏡や植蟲に關する書物や科學のお話の本が五六冊ありました。その一冊を手にとつて開いて見ると、こんな事が書いてあります、「鳥賊（原名セビア・オフィシナリス）は頭足類に屬する軟體動物であつて、その體內には石灰質の乳糜液を含む海綿組織がある。」

隣家のきれいな女の兒はかういふ本が非常に面白いのです。この女の兒には『蜜蜂姫』は讀んで貰ひたくありません。

二

ブランシュランド伯爵の奥方は、眞珠を刺繍した小さな黒の頭巾を金髪
の頭に冠り、寡婦の締める帯を腰に締めて、禮拜堂へ入つて行きました、
奥方は愛蘭の巨人と決闘をして死んだ夫の冥福を祈るために毎日そこ
へ出掛けて行くのです。

その日、奥方は自分の跪臺の布團の上に白い薔薇の花が落ちてゐる
のを見ました、それを見ると、奥方は眞青になりました、眼が眩みまし
た、奥方は頭を下げて、手を握り締めました。それは、ブランシュランド伯
爵家の代々の奥方は、死の前にきつと跪臺の上に白い薔薇の花の落ち
てゐるのを見るといふ言傳へを知つてゐたからです。

奥方は短かい間に妻となり、母となり、寡婦となつたのですが、その
自分の生涯ももう終らんとしてゐるのだと思つて、息子のジョーヂが乳母
の傍で眠つてゐる部屋へ入つて行きました。ジョーヂは今年三歳でした。
その長い睫毛は頬の上に可愛い影を投げ、その口は花のやうに見えます。
頭はない美しい息子を見ると、奥方は泣き出しました。

「赤ちやん」と奥方は歎いて叫びました。「赤ちやん、お前はもう永久に
このお母さんの姿を見る事は出来ないのだよ。私は本當に慈愛あるお前
のお母さんになりたいと思つて、お前を自分の乳で育てました。お前が
可愛いばかりに崇高い騎士の所へ再縁するのも斷りました。」

かう云つて、奥方は自分の繪姿と髪の毛を入れた賞牌形飾に接吻しま
した。奥方はさういふ飾を息子の頸に掛けさせてゐたのです。嬰兒が搖
籃の中で身動きして、小さな手で眼を擦つた時、母親の涙は幼き者の顔
に落ちました。けれども、奥方は顔を反けてその部屋から逃げ出しまし

た。永久にこの世から消去らうとしてゐる母親の眼は、どうして靈魂の曙が見え初めたばかりの、この愛しい眼の光に耐へられるでせう？

奥方は馬の用意を命じ、フランクフルトといふ侍士を伴に連れて、クラリードの城へ行きました。

クラリード公爵の奥方はブランシュランド伯爵の奥方を抱きました。

「まア、嬉しい！ よく来て下さいました。」

「私がこゝへ参りましたのはあまり良い事で参つたのではございません。まア、聽いて下さい。私も夫婦が結婚したのはやつと二三年前ですが、私はもう寡婦になつてしまひました。唯今のやうな武士道時代に、最も偉い人が一番先に死ぬのです、永生をしようと思へば坊さんになるより外はありません。あなたがお母さんにおなりになつたよりも二年前から私は人の母になりました。あなたの娘さんの蜜蜂姫さんは眞晝のやうに愛らしく、私の伴のジョーチも良い見です。私はあなた

を愛して居りますが、あなたも私を愛して下さいます。所が私は跪臺の布團の上に白い薔薇の花が落ちてゐるのを見付けました。私はもう直き死ぬのです、私は伴に別れるのです。」

公爵の奥方は、ブランシュランドの方では白い薔薇の花が見附かると、どういふ事になるのか知りませんでした。が、奥方は泣き出しました、そして涙ながらに、蜜蜂姫とジョーチを兄妹として育て、何でも二人に同じやうに願けてやると約束しました。

二人は手を取り合つたまゝで、小さな蜜蜂姫が空色の明るい幕の下に眠つてゐる搖籃に近づきました。が、蜜蜂姫は眼を開けずに、その小さな手を動かしました。そしてこの女の兒が指を擴げると、五本の小さな薔薇色の光が指の股から輝き出しました。

「ジョーチはよくこの蜜蜂姫さんの面倒を見るでせう。」とジョーチのお母さんが云ひました。

「この見はジョージさんを愛するでせう。」と蜜蜂姫のお母さんが答へました。

「この見はジョージさんを愛するでせう。」とはつきりした小さな聲が繰返へしました、公爵の奥方はその聲は爐の下に永い間住んでゐる妖精の聲だと思ひました。

ブランシユランド伯爵の奥方は、館へ歸ると、侍女たちに寶石を頒けて與り、最後の日に天に昇る自分の身體を淨めるために、身體に香油を塗り、一番立派な着物を着て、寢床に横はり、永久に覺めない眠りに就きました。

三

容貌の醜い人は心が清く、容貌の美しい人は心が醜いのは世の常ですが、クラリード公爵の奥方は容貌も心も共に美しい婦人でした、奥方が

あまり美しいので、多くの王侯は繪姿で奥方を見ればかりなのに、奥方と結婚しようと思いました。しかし、奥方はさういふ王侯に對してかう答へました――

「私はたつた一つの魂を持つてゐます。それと同じやうに夫もたつた一人しか持ちません。」

しかし、五年間夫の喪に服すると、奥方は周囲の人々の幸福を妨げないやうに、みんなが彼女の面前で自由に微笑んだり樂んだりする事が出来るやうに、長い面纱と黒い着物を脱ぎ棄てました。奥方の領地は實に廣大でした、ビース(一種の植物)の一面に生えた荒れ果てた廣い沼地や、漁夫が時々魔魚を捕へる湖や、その下に一寸法師が住んでゐる非常に淋しい山々などがありました。

奥方は一人の老僧の助を藉りてクラリードを治めてゐました。その老僧は、コンスタンチノープル(土耳其)から逃げて來たので、人間が亂暴な

事をしたり欺いたりするのを澤山見て来たから、人の心を信じませんでした。彼は鳥や書物を友達にして塔の中に暮らしてゐました、そしてその塔の中から五つ六つの格言の助によつて政治の相談役としての役目を果してゐました。彼の規則はかういふのでした、「一旦廢された法律は決して復興するな、騒動が起るから人民の要求はいつでも容れてやれ、しかし、出来るだけ徐りと聞容れるがいゝ、一つの事が許されると、人民は直ぐに又別の要求をするからだ、あまり早く要求を聞容れると、あまり長く反對してゐる時と同じやうに、騒動が起る。」

公爵の奥方は老僧の思ふ通りに政治をやらしてゐました、奥方は政治の事は何にも知らないからです。奥方は情深い人でした、奥方はすべての人を尊敬をする事は出来なかつたかも知れないが、心のねぢけた人の不幸を憐みしました。奥方はあらゆる手段をもつて惱める人を助けました、病人を見舞ひ、寡婦を慰め、貧しい孤兒の世話をしてやりました。

奥方は娘の蜜蜂姫を立派に教育しました。善い行をするやうに育て上げましたので、奥方は自分の子供がどんな遊びをしても制めませんでした。

奥方は氣の毒なブランシユランド伯爵の奥方との約束を守りました。奥方はジョーヂの母親も同じ事で、彼と蜜蜂姫との間に差別をしませんでした。二人は揃つて大きくなりました。ジョーヂは蜜蜂姫が自分よりも小さいと思つて、彼女を賞めてやりました。二人がまだ極く幼ない頃、ジョーヂは蜜蜂姫に近づいて、かう訊きました——

「私と一緒に遊ばない？」

「遊びませう。」も蜜蜂姫が云ひました。

「泥でお饅頭を拵へよう、」とジョーヂは云つて、泥の饅頭を拵へ始めました。所が、蜜蜂姫の拵へかたが拙かつたので、ジョーヂは自分の鋤で彼女の指を打ちました。すると、蜜蜂姫はあらん限りの大聲を上げましたの

で、庭を散歩してゐた侍士のフランクールが、若主人に向つて云ひまし
た。

「フランシュランド伯爵ともあらう御方が女の方をお打ちになるもので
はございません。」

と、ジョーヂはフランクールをも鋤で打ちたくなりました。しかし、そ
れは自分の手に負へぬ六ヶ敷い事だったので、彼はもつとし易い事をし
ました、即ち、大きな樹の幹に鼻を押附けて、ワツと泣き出しました。
その間に、蜜蜂姫は拳で眼をほじつてもつと涙を流さうとしましたが、
思ふやうに涙が出ないので、鼻を樹の幹に擦りつけました。夜が来て、
闇が静かに地上を蔽うても、蜜蜂姫とジョーヂは各自樹の前に立つて泣い
てゐました。クラリード公爵の奥方は已むを得ずその傍へ来て、片手で
自分の娘を引張り、片手でジョーヂを引張つて、城へ連れて歸りました。
二人の眼は赤くなり、鼻も赤くなり、頬は輝いてゐました。二人は溜息

を吐いて、悲しげに歎歎しました。が、二人は夕食に御馳走を喰べまし
た、そして御飯が済むと寢床へ入れられました。所が、燈火が吹消され
るや否や、二人は寢衣のまゝで二人の小さな幽霊のやうに出て来て、互
ひに抱合つて、聲を限りに笑ひ出しました。

こんな風にしてクラリードの蜜蜂姫とフランシュランドのジョーヂは仲
がよくなりました。

四

こんな風に、ジョーヂと蜜蜂姫は一緒に城の中で大きくなり、ジョーヂは
蜜蜂姫を可愛がつて妹と呼んでゐましたが、本當の妹でない事は知つて
ゐました。

ジョーヂは劍術、馬術、水泳、體操、舞蹈、狩獵、鷹狩、庭球など、あ
りとあらゆる技術に熟達しました。彼には狩字の師匠までも隨いてゐま

した。師匠は舉止は謙遜つてゐるが心の中では傲慢な年を老つた坊さんで、ジョージに習字を教へましたが、字は美しくなればなるほど讀みにくくなりました。ジョージはこの老僧の課業が面白くもなく、利益にもならぬと思ひました、今一人の老僧が彼に野蠻國の言葉を教へる時もさう思ひました。人が當然知つてゐる筈であつて、母國語とさへ云はれてゐる言葉を學ぶといふのは、どういふ理由かジョージには解りませんでした。

ジョージは侍士のフランクルと一緒にゐる時だけは楽しいと思ひました、フランクルは世界を道ひ歩いて、人間や獸の生活をよく知つて居り、國々の風俗を話したり、字には書けないが歌を作つたりする事が出来るのです、フランクルはジョージに物を教へた一人の先生でした、それは彼が心からジョージを愛してゐたからなのです、良い教訓は愛をもつてしなければ與へられないのです。

年を老つたぎよろしく眼の習字の師匠と文法の先生とは、非常に仲が

悪るかつたのですが、この年を老つた侍士を憎む時には同盟しました、二人はこの侍士を醉漢だと悪口を云ひました。

成る程、フランクルは「白目の壺」といふ料理屋へ足繁く通ふのでした、彼はそこで悲みを忘れたり、歌を作つたりするのでした。が、無論、それは彼にとつては甚だ悪い事でした。

ホーマー(希臘の名)はフランクルよりもつと良い詩を作りましたが、ホーマーは泉の水しか飲まなかつたのです。悲しい事は全世界何處へ行つてもあるのです、そしてそれを忘れさせるのは飲む酒ではありません、善人はそれを忘れるのです。しかし、フランクルは勤務のために頭の毛が白くなつた程にも忠義な、信用の出来る老人ですから、習字の師匠と文法の先生は奥方にその缺點を大袈裟にして告口するよりも、それを隠してやらなければならぬのです。

「フランクルは醉漢です。」と習字の師匠は云ひます、「奴は「白目の壺」

から歸へる途中、歩きながらSの字を書いて居ります。奴はSの字しか書いた事がございせんが、恐れながら申し上げますが、それはあの醉漢が馬鹿だからでございます。」

文法の先生はかう口を添へます、「フランクフルがよろけながらうたふ歌は文法に適つて居りませんし、全く手本なしで作つたものでございませぬ。恐れながら申し上げますが、奴はあらゆる修辭法(詩を作る規)を無視して居ります。」

奥方は生れながらにして學問を銜ふ人間や悪口を云ふ人を好かないのでした。奥方は、誰でも奥方の地位にゐたらするだらうと思ふ事をしました、即ち、初めは奥方は二人の言ふ事を聴きいてゐませんでした、二人が又もやお喋りを始めると、奥方はお前方の云ふ通りだと云ひました、そしてフランクフルを城から追放する事に決めたと言ひました。しかし、この追放は名譽ある追放で、奥方は法王の祝福を受けに羅馬へ彼

を遣つたのでした。侍士のフランクフルはこの旅に出て長い間歸つて來ませんでしたが、何故といふに、音楽家が大量出入りする酒場が非常に澤山あつて、コンスタンチノールからクラリッド公爵の領地まではなかなか歸つて來られなかつたからです。間もなく公爵の奥方が二人の子供からこの最も忠實な附添人を奪つた事をどれほど歎かれたかはこの物語を読んで行くうちに分ります。

五

復活祭が済んでから初めての日曜日でした、公爵の奥方は、朝大きな栗毛の馬に乗つて城を出掛けました、奥方の左側にはブランシュランドのジョーヂが黒い額に白い星のある黒馬に跨り、右側には蜜蜂姫が乳色の駿馬に乗り、薔薇色の手綱を持つて、進みました。三人は祈禱を聴きに隠者の庵へ出掛けたのです、槍を持った兵隊が三人を護衛しました、一行が

通ると、人民が群集つて口々に三人を褒め稱へました、全く三人とも非常に美しいのです。銀色の花を散らした而紗を冠り、外套を風に靡かした奥方の姿は美しく威厳がありました、眞珠を刺繍した頭巾は和かな光を放ち、その光はこの美しい婦人の顔と魂によく應ひました。奥方の傍で馬を進めてゐるジョーヂの風に靡く髪と輝く眼は、見るも心持がいい。又片一方の側を進んでゐる蜜蜂姫の顔の優しい清らかな色も人の眼を喜ばしましたが、中でも一番美しいのは捲髪で、三つの黄金の花を載せた黄金の飾環で留め、肩の上に流れて、それは彼女の若さと美の輝やく外覆とでもいふやうでした。人民は蜜蜂姫を見るとかう云ひました、

「何て可愛らしい御嬢様だらう。」

年を老つた洋服屋のジャン親方は抱いてゐた孫のピーターに蜜蜂姫を指さして見せました、するとピーターはあの人は生きてゐるのか、それとも蠟細工かと訊きました、そんなに色が白くて可愛らしい人がこの世に

あらうとはピーターには思へなかつたのです、小さなピーターは日に焼けた大きな頬べたをして、田舎風に後にレースを附けた手織の襯衣を着てゐましたが、蜜蜂姫がそのピーターと同じ人間だとは考へられなかつたのです。

奥方は人民にやさしく會釋をされましたが、二人の子供は如何にも満足げに見えました、ジョーヂは顔を赤らめ、蜜蜂姫はにこ／＼してゐました、奥方は人民が自分たちを敬ふ理由を二人に話しました。

「人民は何と鄭重に私たちに御挨拶をする事でせう。何故でせう、ジョーヂ？ 何故でせう、蜜蜂姫？」

「人民はさうしなくてはならぬからです。」と蜜蜂姫が答へました。

「それが人民の義務だからです。」とジョーヂが云ひました。

「しかし、何故その義務があるのでせう。」と奥方がお訊きになりました。

二人とも答へがないので、奥方はかう云ひました。

「それはかういふ理由があるのです。三百餘年の間、クラリード公爵家の主人が、父から子の代に亙つて、手に槍を持つて、貧しい人民が自分たちの手で種子を播いた畠から收穫をする事が出来るやうに彼等を保護したからです。三百餘年の間、クラリード公爵家の代々の奥方が貧しい人民のために着物を織り、病人を見舞ひ、嬰兒を洗禮盤に入れたからです。それだから、人民がお前たちに挨拶をするのです。」

ジョーデは考へ込みました、「私たちは土地を耕やしてゐる人を保護しなければならぬ。」すると、蜜蜂姫も云ひました、「貧乏な人のために糸を織がなければならぬ。」

こんな風に話をしたり考へたりしながら、三人は花の咲いてゐる牧場を通りました。青い山脈の縁が遠くの野の端づれに現はれました。ジョーデは東の方を指さしました。

「あすこに見えるのは大きな鋼鐵の楯ですか。」

「いえ、違ひます。」と蜜蜂姫が云ひました、「あれはお月様のやうに大きい丸い銀の鈴止です。」

「あれは鋼鐵の楯でもなければ銀の鈴止でもありません。」と奥方が答へました、あれは日光に輝いてゐる湖です。あの湖の表面は、こゝから見ると鏡のやうに滑かに見えますが、近くで見ると無數の小波が動いてゐるのです。金屬を切つたやうにかつきり見える湖の縁は、實際は羽のやうな花を附けてゐる葦や、劍の刃と刃との間から人が覗いてゐるやうな形の花を附けてゐる溪蓀が一面に生えてゐるのです。毎朝湖の上に白い霧が立上つて、湖は眞晝の太陽に輝く鏡のやうに輝きます。湖には水魔が住んでゐて附近を通る人をその透明な家へ引張り込むから、あすこへ近づいてはいけません。」

その時、隠者の庵の鈴が鳴りました。

「馬を降りませう。」と奥方は云ひました、「そして禮拜堂へ入りませう。」

東方の博士たちが馬槽に近づいた時には、象や駱駝の背に乗つてゐらつしやいませんでした。(馬槽の中で生れた耶穌を求めて)「東方から来た博士たちをいふ」]

三人は隠者の祈禱の聲を聞きました。ぼろ／＼の着物を着た嫌らしい梅干婆さんが奥方の傍へ跪き、奥方が禮拜堂を出ようとするると聖水を差出しました。

「これをお受けなさい、お母さん。」と婆さんは云ひました。

ジョーヂは吃驚しました。

「お前たちは貧しい人の中に、主なる耶穌基督のお選びになつた貴い人がゐる事を知らないのですか。お前が洗禮を受けた時に、あんな乞食とロシユノアール公爵とが洗禮盤の中へお前を入れたのです、お前の妹の蜜蜂姫の命名親もあゝいふ貧しい人の一人でした。」

梅干婆さんはジョーヂの腹の中を見透かしたのか、彼の方へ身體を屈めました。

「美しい王子様。」と梅干婆さんは嘲るやうに叫びました、「私は澤山の王國を失くしましたが、あなたは私の失くした澤山の王國を征服して御覽なさい。私は眞珠の島や黄金の山の女王でした、毎日私の食卓の上には十四種類の魚が並びました、黒人の小姓が私の長い裾を持ちました。」

「では、あなたはどういふ不幸があつてその島や山を失くしたのですかお婆さん？」と奥方が尋ねました。

「私が一寸法師どもを窘めたので、奴等が私を領地の外へ放り出したのです。」

「その一寸法師はそんなに強いのか？」とジョーヂが訊きました。

「奴等は地の中に住んでゐますので、寶石の性質を知つてゐます、奴等は金屬で細工をします、それから泉の出る源を探し出します。」と婆さんが答へました。

「あなたはどうして一寸法師たちを窘めたのですか？」と奥方が訊きま

した。

「十二月の或る晩でした。」と梅干婆さんが云ひました、「一人の一寸法師がやつて來まして、真夜中に大宴會を開くから城の臺所で、御馳走の支度をさしてくれと云ひました、城の臺所は僧會會館(僧侶の會館に集まる家)よりも廣く、シチウ鍋、フライ鍋、瀬戸物の手鍋、藥罐、鍋、持運びの出來る竈焙器、蒸氣釜、脂鍋、和蘭竈、魚釜、銅鍋、麥粉菓子(マクワシ)の型、金銀の臺附盃(サイ)などがありました、きれいな鑄物の肉焼道具や自在鍵(ジザイ)にぶら下つてゐる黒い大釜などが備へ附けてある事は申すまでもありません。一寸法師は散らかしたり道具を壊したりしないと約束しましたが、私はそれを斷りました。すると、一寸法師は口の中で脅かし文句をぶつく〜吐きながら消えてなくなりました。それから三日目の晩はクリスマスでしたが、前に來たのと同じ一寸法師が、又私の寢てゐる部屋へやつて來ました。奴は無數の一寸法師と一緒に來て、私を寢床から引摺り出し、寢衣のま

まで、知らない土地へ私を連れて行つてしまひました。奴等は私を放つばる時にかう云ひました。「金持の癖に、黄金の中で働いて泉を流し出す働きの者の親切な一寸法師に道具を使はせないから、その罰だぞ。」齒の抜けた婆さんはかう云ひました、奥方は婆さんを慰めてお金を與りました。そして奥方と二人の子供は城へ引返へしました。

六

それから暫らく經つて、或る日蜜蜂姫とジョーヂは人に見附からぬやうに、クラリード城の中央に立つてゐる物見の塔の階段を攀登りました。塔の上に達すると、二人は手を叩いて聲を限りに叫びました。二人は丘の麓の蒼色や緑色をした四角な畑を見晴らしました。遠くの地平線には森や山が薄青く煙つてゐます。

「御覽、世界中が見えるよ！」とジョーヂが叫びました。

「世界は大きいのねえ。」と蜜蜂姫が云ひました。

「先生が世界は大きいッておつしやつてよ、でも、家命のゲルトロードは何事でも一遍見なくちや本當に分らないと云つてよ。」

二人は塔の縁へ出て見ました。

「不思議だわ、兄さん。」と蜜蜂姫が叫びました、「お城は地球の真中に立つてゐるでせう、私たちはお城の真中の物見の塔の上にあるんでせう、だから、私たちは地球の真中にあるんだわ。は！ は！ は！ は！」
全く、地平線は子供たちの周囲に大きな圓を描いてゐるので、物見の塔はその圓の中心にあるのです。

「僕たちは地球の中央にゐるんだ！ は！ は！ は！ は！」
そこで、二人とも考へ込みました。

「世界がこんなに大きいのは困つたものだ！」と蜜蜂姫が云ひました。

「人が迷子になつてしまふし、友達と別れなければならぬ。」

ジョーヂは肩をすぼめました。

「世界がこんなに大きいのは實にいゝ！ 冒険をやりに行く事が出来る僕は大きくなつたら、地球の果てにある山へ登るんだ。その山からお月様が出るんだよ、僕はお月様を上る時、お月様を捕へてお前に與るよ。」
「えい、私に頂戴、私はお月様を髪に挿すわ。」

やがて、二人は恰度地圖でも見てゐるやうに自分たちの知つてゐる場所を指でさしました。

「私みんな分つてよ。」と蜜蜂姫が云ひましたが、その實何處も分らないのです、「でも、あの丘の上に四角い石を撒いたやうに見えるのは何でせう？」

「家だよ。」とジョーヂが答へました、「あれは家だよ。クラリード公國の首府を知らないのかね？ つまり、あれは大きな町なんだ、街路が三つあつてね、その街路は馬車で通れるんだよ。先週隠者の庵へ行つた時、

あすこを通つたのをもう忘れちやつたの？」

「あのうねくした水は何でせう。」

「あれは河だよ。あすこに古い石橋が見えるでせう。」

「橋の下で蝦を釣つたあの橋？」

「あれさ、岩穴の中に「首無し女」の像が立つてゐるのだが、小さいからこゝからは見えない。」

「覚えてゐるわ。でも、あの女は何故首がないんでせう？」

「きつと失くしたんでせうよ。」

それで分つたのか、蜜蜂姫は何も問返へさずに、地平線の方を眺めました。

「兄さん、兄さん、御覽なさい、青い山の傍が光つてゐるわ。あれは湖よ。」

「あれは湖だ。」

そこで、二人は奥方が、水魔の住んでゐるこの美しくて危険な湖の事を話したのを思ひ出しました。

「あすこへ行つて見ませう。」と蜜蜂姫が云ひました。

ジョーヂは吃驚しました。彼は大きな口を開いて蜜蜂姫を睨み附けました。

「お母様が獨りであすこへ行つちやいけないっておつしやつたぢやないの、それに地球の果てにあるあの湖へどうして行けよう？」

「どうして行けようですって？ 私には分らないわ。どうしたら行けるかあなたは知つてゐるでせう、だつて、あなたは男で文法の先生が附いてゐるぢやないの。」

ジョーヂはこの言葉を聞くと沸然として、たとへ男であつても、どんな大膽な人でも、世界中の道をみんな知つてゐはしないと答へました。すると、蜜蜂姫は嘲るやうに冷やかにかう云ひました——

「私は青い山へ登つて、お月様を捕へるなんて一度も云つた事はなくつてよ。私は湖へ行く道を知らない、でも、それを見付けようと思つてゐるわ。」

ジョーヂは耳まで眞赤になつて、笑つてごまかさうとしました。

「兄さんは胡瓜のやうに笑ふのね。」

「胡瓜が笑つたり泣いたりするものか。」

「若し胡瓜が笑つたら兄さんのやうに笑ふだらうて云ふのよ。私はどうしても湖へ行つてよ。私は水魔の住んでゐる美しい湖へ行くから、兄さんは温順しいお嬢さんのやうに家で待つてらつしやい。私のお針仕事と人形を兄さんに上げるわ。大事にして頂戴、兄さん、大事にして頂戴！」

ジョーヂは高慢な男の兒ですから、蜜蜂姫にやりこめられた事が直ぐ分りました。

ジョーヂは陰氣な顔をして、頭を下げて、嘔れ聲でかう叫びました。

「よし、では、湖へ行かう。」

七

その翌日、お晝の御飯が済んで、奥方が自分の居間へ入ると、ジョーヂは蜜蜂姫の手を取りました。

「さア、お出で！」とジョーヂは云ひました。

「何處へ？」

「黙つて！」

二人は階段を匍降り、庭を横切りました。裏門を出ると、蜜蜂姫は又もや何處へ行くのかと訊きました。

「湖へ行くんだ。」とジョーヂがきつぱり云ひました。

蜜蜂姫は大きな口を開いたが、口を利きませんでした。お母様の許し

もなく、繻子の靴を穿いてそんな遠くまで行くとは！ 蜜蜂姫の靴は繻子で出来てゐるのでした。

「行かなくちやならん、恐い事はないよ。」

ジョーヂはかう威張つて答へました。蜜蜂姫は昨日ジョーヂをやりこめて置きながら、今驚いたやうな風をしたのです。

今度はジョーヂが人形を持つて遊んでゐるなどと云つて蜜蜂姫を辱める番です。女の兒はいつも人を釣込んで置いて、自分は逃げるものです。何て卑怯なんでせう！ 蜜蜂姫は家にゐてもいゝ。ジョーヂは獨りでも行くでせう。

蜜蜂姫はジョーヂの腕にかちり附きました、ジョーヂは彼女を押し退けました。

蜜蜂姫はジョーヂの頸にぶら下りました。

「兄さん」と云つて蜜蜂姫は歎息しました、「私も随いて行つてよ。」

蜜蜂姫が心から悔いるのでジョーヂはそれに感じました。

「ちや、お出で、見附けられるから町は通れない。堡塞に随いて行つて、十文字になつた道の所から往來へ出よう。」

そこで、二人は手を取り合つて出掛けましたが、ジョーヂは遂に自分の計畫を説明しました。

「この間隠者の庵へ行つた時通つた道を行かう、さうすればこの間のやうに湖が見えるだらう、それから、畠を蜂の線に横切ればいゝ。」

「蜂の線」といふのは眞一文字にといふ事で田舎言葉ですが、二人は大聲で笑ひました、女の兒の名前の蜂といふ言葉が變に聞えたからです。

蜜蜂姫は壕の縁で花を摘みました、彼女は亞爾答亞（アールダア）の花や、白ムラインや、紫苑や、菊などで花束を作りました、花は彼女の小さな手の中で萎れ、彼女が古い石橋を渡つた時には憐れな有様になつてゐました。蜜蜂姫は花をどうしていゝか分らないので、生返へらせるために水の中

へ投込まうと思ひましたが、とう／＼それを「首無し女」に與る事にしました。

蜜蜂姫は手が届かないから身體を抱き上げてくれとジョーヂに頼みました、そして古い石像の重ねた手の上へ一抱への野の花を戴せました。遠くへ行つてから彼女が後を振り返つて見ると、一羽の鳩が古い石像の肩に棲つてゐました。

暫らく歩いてゐるうちに、蜜蜂姫は「私喉が渴いたわ。」と云ひました。

「僕も喉が乾いた。」とジョーヂが云ひました、「河はもうすつと後になつてしまつたし、この邊には小河も泉も見えない。」

「お天道様があんまり暑いので水をみんな飲でおしまひになつたのよ。どうしたらいいでせうねえ。」

こんな事を話して水のないのを残念に思ひながら歩いて行きますと、

向うから果物の籠を持つた一人の百姓女が來ました。

「櫻實だ！」とジョーヂが叫びました。「残念だ、買ひたくてもお金を持つてない。」

「私お金を持つてゐるわ。」と蜜蜂姫が云ひました。

蜜蜂姫は金貨が五枚入つてゐる小さな巾着をポケットから出しました。

「お婆さん、この着物に入るだけ櫻實を頂戴な。」と蜜蜂姫は百姓女に云ひました。

そして、両手で着物の裾を引上げました。女は櫻實を一掴みか二掴み投入しました。蜜蜂姫は片手で裾を持ち、片手で金貨を一枚百姓女の方へ差出しました。

「これで澤山？」

百姓女はその金貨を掴みました、その金貨が一枚あれば、籠の中の櫻實はおろか、その櫻實の實つた櫻の樹と櫻の樹の生えてゐる地面

とが買へるのです。

抜い百姓女はかう答へました——

「澤山でございませう、櫻實はそれだけでようございませうか、王女様。」
「ちや、もう少し兄さんの帽子に入れて頂戴。さうすれば、金貨をもう一つ上げませう。」

百姓女はその通りにしました。百姓女は二枚の金貨を古靴下の中に隠したのか、それとも畳の下に隠したのかと考へながら歩いて行きました。

一方、二人の子供たちは、櫻實を喰べ、右や左へ石を投げながら歩いて行きました。ジョーチは一本の莖に二つ宛實つてゐる櫻實を取つて、妹の耳環を拵へました、ジョーチは美しい二仔のきれいな赤い櫻實が妹の頬の上にぶら下つてゐるのを見て笑ひました。

一粒の小石が二人の楽しい歩みを止めました。小石が蜜蜂姫の靴の中

へ入つて、跛を引き出したのです。蜜蜂姫が一足歩るく毎に、その黄金色の捲髪が頬にぶつかりました、跛を引いて歩いてゐるうちに、とうとう路傍の土堤の上に坐つてしまひました。兄さんは蹲んで縞子の靴を脱がせ、それを手に持つて振ると小さな白い小石が落ちました。

「兄さん、今度湖へ行く時には長靴を穿いて行きませう。」と蜜蜂姫が足を跳めて云ひました。

太陽はもう夕焼の空に沈まうとしてゐます、和かい微風が二人の頬や頸を撫でました、そこで、二人は楽しく、元氣を出して、進んで行きました。樂に歩けるやうに、二人は手を繋ぎました、二人は自分たちの動く影が眼の前で消えて行くのを見て笑ひました。

二人はかういふ歌をうたひました——

女の子のマリアンが、

王蜀黍袋背負つて、

お猿のジャン連れて、

水車小舎へ行きました。

マリアンは可愛い娘、

お猿に乗つて、

水車小舎へ行きました。

蜜蜂姫が急に立停りました。

「靴が脱げたわ、靴が。」と叫びました。本當に靴が脱げたのでした。絹のレースの延びてしまつた繻子の靴が泥だらけになつて道に轉がつてゐました。やがて、蜜蜂姫が後を振返つて見ると、クラリード城の塔が遠方の夕暮の空に消えやうとしてゐますので、急に悲しくなつて、涙が眼に浮びました。

「狼が私たちを喰べてしまふでせう。」と蜜蜂姫が叫びました、「お母さん、私はもう私たちに會へないので、悲くて死んでおしまひになるでせう。」

が、ジョーヂが靴を穿かせながら妹を慰めました。

「お城の夕飯の鐘が鳴るまでにはクラリードへ歸るよ。さあ、行かう！」

水車屋はマリアンが、

來るのを見附けて大聲で、

お前のお猿のチャン坊を

こゝへ繫げと云ひました。

マリアンは可愛い娘、

おれたちを連れて來た、

お猿を繫げと云ひました。

「湖だ、御覽、湖だ、湖だ、湖だ、湖だ！」

「えゝ、兄さん、湖だわ！」

ジョーヂは大聲で「萬歳」と叫んで、帽子を空へ投上げました。蜜蜂姫も何か投上げなければならぬので、もう役に立たなくなりかけてゐる靴

を脱いで、嬉しさに頭の上へ投上げました。

湖は溪の奥にありましたが、その彎曲した岸に茂つてゐる葉や花は恰度銀の水の縁にはめた梓のやうでした。湖は清らかで静かでした、その岸で緑の色が揺れるのさへはつきり分りました。

が、二人の子供は草叢の中の路が分らないので、美しい湖水の岸へ近づくと事が出来ませんでした。

二人は道を探してゐるうちに、羊の皮の着物を着て樹の枝を持つた小さな女の兒が鷺鳥を追つて來るのに出遭ひました。ジョーチは女の兒の名前を尋ねました。

「ギルベルト。」

「さうか、ちや、ギルベルト、湖へ行くにはどう行つたらいいね？」

「誰も湖へは行かないの。」

「何故？」

「だつて……」

「でも、誰かが行つただらうぢやないか？」

「誰か行つたら、道があるわ、みんながその道を通るわ。」

ジョーチはこの女の兒に尋ねたつて分らないと考へました。

「行かう。」とジョーチは云ひました、「もつと先きのあの森の中にきつと道があるよ。」

「胡栗を拾つて喰べませう。」と蜜蜂姫が云ひました、「私 お腹が空いたんですもの。今度湖へ來る時は旨しいものをどつさり入れた手提靴を持つて來なくちやいけないわ。」

「さうだ。」とジョーチが云ひました、「侍士のフランクフルは羅馬へ行く時、お腹が空いた時の用意に鹽豚肉と、喉が乾いた時の用意に水罐を持つて行つたが、あれは良い考だ。だが、急がう、何時だか分らないけれども遅いやうだから。」

「羊飼の女はお天道様を見ると時間が分るのね。」と蜜蜂姫が云ひました。「私は羊飼の女ぢやないから分らないわ。でも、私たちが出て来た時はまだお天道様が頭の上にあつたけれど、もう町やクラリード城の後へ沈まうとしてゐるのね。毎日かうなんでせうか、これには何か意味があるのでせうか？」

二人が太陽を見てゐますと、道路に埃の雲が上つて、キラ／＼する武器を持った騎士が全速力で馬を駆けさして来ました。二人の子供は非常に恐がつて草叢の中へ隠れました。「あれはきつと泥棒か食人鬼だ。」と二人は考へました。その騎士は、クラリード公爵の奥方の命令でジョーヂと蜜蜂姫を探しに來た衛兵たちだつたのです。

二人の小さな探検家は草叢の中に小さな徑を見附けました。その徑には人間の足痕は一つもなく、掻きむしつたやうな無数の極く小さな足痕が附いてゐます。

「これは小さな悪魔の足痕ですよ。」と蜜蜂姫が云ひました。

「牡鹿の足痕かも知れない。」とジョーヂが云ひました。

それは、何者の足痕だか分りませんでした。しかし、その小徑がだんだん下り坂になつて、それを進めば二人の目の前に横はつてゐる淋しいきれいな湖の縁へ行ける事は確かでした。柳の樹はその優しい葉で湖の縁を圍繞いてゐます。葦の細い葉は花車な羽のやうに軽く水の上で揺れてゐます。葦原は震へる島のやうで、その島の周囲には水百合が大きな心臟形の葉や雪のやうに白い花を擴げてゐます。この花咲く島の上を、碧玉色の蜻蛉がすい／＼と飛んで、急に方向を變へてゐます。

二人の子供は嬉しさの餘り、火熱つた足で、問荊や香蒲の一面に生えた濕つた砂の上へ跳降りました。菖蒲は奥床しい香を放ち、車前草は眠つたやうな水際でレースの如き花糸を延ばし、姫柳はぼつ／＼紫色の花をつけてゐます。

蜜蜂姫は二つの柳の木立の間にある砂地を横切りました。と、その邊りに住む妖精が眼の前の水へ跳込みました、水は輪を描き、その輪はだんだんと大きくなつて、終ひに消えてしまひました。それは妖精ではなくて、腹の白い、小さな緑色の蛙でした。邊りは森としてゐます、爽やかな微風が透明るやうな湖の表面を撫で、小波は微笑んでゐるやうです。

「この湖はきれいね。」と蜜蜂姫は云ひました、「靴が裂けたので、足から血が出てゐるわ、それに私はお腹が空いたわ。お城へ歸りたくなつた。」
 「草の上へお坐り。私が足を葉つばで包んで冷やしてあげるよ、そして、何か喰べる物を探して來よう。先刻あすこの道路に熟した懸鉤子が實つてゐるのを見附けて置いた。この帽子の中へ一番甘いのを取つて來て上

げるよ。手巾をお貸し、莓を入れて上げやう、この樹の蔭の小徑の縁に莓が實つてゐるよ。それから、ポケットに胡栗を一杯入れて來よう。」と
 ジョーチが云ひました。

ジョーチは蜜蜂姫のために湖の縁の柳の樹の下に苔の寢床を拵らへてから、出掛けて行きました。

蜜蜂姫は手を重ねて小さな苔の寢床の上に臥ながら、青白い空で顔へてゐる一番星の光を眺めてゐました、やがて、彼女は眼を半分閉ぢました、頭の上へ鳥に乗つた小さな一寸法師がやつて來たやうな氣がするのです。それは夢ではありませんでした。一寸法師は鳥の口に啣へさせてゐた手綱を引いて、蜜蜂姫の真上で立寄り、くりくした眼で彼女を見下ろしてゐるのです。蜜蜂姫はその光景をばんやり見ましたが、やがて眠つてしまひました。

ジョーチが歸つて來て、拾ひ集めた果實を彼女の傍に置いた時は蜜蜂姫

はまだ眠つてゐました。ジョーヂは蜜蜂姫が眼を覺ますのを待つてゐる間に、湖へ降りて行きました。湖は薄青い衣を着て眠つてゐます。不圖見ると、月が樹の間に現はれ、波が無数の星を撒散らしたやうに煌き出しました。

しかし、湖の水が輝き出したのは月の光が映るからだけではありませんでした、青い炎が踊るやうに揺れたり上下に動いたりして、輪を描きながら波の上を進んで來るのでした。間もなくジョーヂはその青い炎が女の白い顔を照らすのを見ました、その女の顔は非常に美しく、波頭の上に出てゐて、頭には海草や貝殻を冠り、海のやうに緑色の捲髪は肩の上の流れ、胸の下で靡いてゐる薄紗には眞珠が光つてゐます。ジョーヂは水魔を見たので、逃げ出さうとしました。けれども、逃げる間もなく、水魔は冷い手で彼を捕へました、そして腕いたり泣いたりしたがその甲斐もなく、水晶や岩石の層に沿うて水の底へと連れて行かれました。

九

月は湖の上の上つて、水はもう月の光のみを映してゐます。蜜蜂姫はまだ眠つてゐました。先程彼女を見て居た一寸法師が、又もや鳥に乗り、今度は大勢の仲間を連れて歸つて來ました。一寸法師たちは實に小さな男で、白い髯を膝の邊まで垂らしてゐます。彼等は子供のやうな姿をした老人でした。革の前掛を締め、帯に金槌をぶら下げてゐるところを見ると、彼等は金細工を商賣にしてゐるらしいのです。その歩容は變な歩容です、驚くほど高い所へ飛上つて、妙な宙返りをするのです、その動作の速い事と云つたら、人間ぢやなくて妖精かと思はれる位なのです。しかし、彼等は踊つたり跳ねたりして向ふ見ずに騒いでゐるかと思ふと、その動作は非常に落着いた所があつて、どちらが本當の性質だか分からない位なのです。

一寸法師どもは眠つてゐる女の兒の周圍に輪を描いて坐りました。

「さア。」と一番小さな一寸法師が云ひました、「さア、おれが嘘を吐いたかどうだ、見ろ、湖の縁に非常に可愛らしい王女が眠つてゐるではないか、おれにこゝへ連れて来て貰つて、みんな禮を云はぬか？」

「有難う、ポップ。」と老詩人のやうな恰好をした一寸法師の一人が答へました、「全く、世の中にこんな美しい女の子はない。この子は山の上に昇る曙の色よりももつと薔薇色だ、この子の捲髪の金色はおれたちの鑄物にする金よりももつと明るい色をしてゐる。」

「うむ、ビック、お前の云ふ通りだ。」と一寸法師どもが叫びました、「だが、この可愛らしいお嬢さんをどうしやう？」

老詩人のやうな様子をしたビックは返答をしませんでした、きつと彼もみんなと同じくこの美しい女の子をどうしたらいいか分らなかつたのでせう。

「大きな籠を拵へてその中へ入れて置かう。」とルッグといふ名の一寸法師が云ひました。

ディグといふ今一人の一寸法師がそれにひどく反對しました。ディグの考では、籠の中へ入れるのは獸だけで、この美しい女の子はどこから見ても獸のやうな恐ろしい動物ではないといふのでした。

けれども、ルッグは他にいふ考が見附からぬので、自分の意見を云ひ張りました。ルッグは自分の意見を巧みに辯護しました。彼はかう云ひました——

「この女の子は野蠻な獸ではないが、籠に入れて置けばきつと獸になるだらう、だから、どうしても籠へ入れなくちやならない。」

一寸法師どもにはこの考が氣に入リませんでした、タッドといふ一人の一寸法師は非常に憤慨しました。タッドは美しい女の子をその親たちの所へ返さう、親たちはきつと立派な貴族に違ひない、と云ひました。

しかし、この考は一寸法師の習慣に反くものであると云つて卻けられました。

「吾々は、習慣よりも寧ろ正義に従ふべき筈だ。」とタッドが云ひました。が、もう唯一人タッドの言葉に注意する者はありませんでした、所が、ポーといふ一番正しい一寸法師が次ぎのやうな勸告をしますと、集會が急に騒々しくなりました。

「先づ吾々はこの女の子を起さなくてはならぬ、女の子は眠りこけてゐるからな、若し今晚こゝで寝ると、明日の朝は女の子の眼瞼が脹れ上つてしまつて、女の子の顔が醜くなるだらう、湖水の縁の森の中で眠るのは大毒だからな。」

一同はこの考へに賛成しました、誰もこの考がいけないといふ者はありませんでした。

老詩人のやうな様子をしたビツクは心配さうに女の子に近づきました、

そして自分が一目見たらどんなによく眠つてゐても直ぐに眼を覺ますだらうと考へながら、凝つと彼女の顔を見守りました。が、ビツクの考は間違つてゐました、ビツクが幾ら眺めてゐても、蜜蜂姫は手を重ねたまゝ眠り續けてゐるのです。

人の好いタッドは、この有様を見て、蜜蜂姫の袖を静かに引張りました。すると、蜜蜂姫は眼を細く開け、肘を突いて身體を起しました。蜜蜂姫は自分が苔の寢床の上に臥て、一寸法師ともに圍繞かれてゐるので、先刻のは夢ではなかつたかと考へました、そして、これが夢で本當はいつものやうに朝の清らかな光の射込むお城の小さな青い部屋にゐるのであつてくれゝばいゝと思ひながら、眼を擦つてはつちり開けやうとしました。蜜蜂姫はぐすり眠つたので、自分が湖へ來た事は忘れてしまつたのです。しかし、幾ら眼を擦つても駄目でした、一寸法師は消えないのです、で、蜜蜂姫はそれが本物だと思はずにはゐられませんでした。そこ

で、彼女は恐々あたりを見廻はしましたが、森を見ると、何もかも思ひ出しました。

「ジョーヂさん！ 兄さん！ ジョーヂさん！」と蜜蜂姫は身悶えして叫びました。一寸法師どもは周囲を飛び廻りましたが、蜜蜂姫はそれを見るのが怖いので、両手で顔を隠しました。

「ジョーヂさん！ ジョーヂさん！ ジョーヂさん！ 何處へ行つたの？」と云つて蜜蜂姫は歎きました。

一寸法師どもはどう云つて慰めていゝか分かりませんでした。蜜蜂姫は激しく泣いて、お母さんや兄さんを呼びました。

ポーは貰ひ泣きがしたくなつたので、蜜蜂姫を慰めやうと思つて、かう云ひました。

「そんなにお泣きなさるな。あなたのやうな可愛い娘さんが眼を泣き眠らすのはお可愛想です。それよりか、どうしてこゝへ來たのかお話しな

さい、そのお話はきつと面白いでせう。」

蜜蜂姫はポトの言葉が耳に入りませんでした。彼女は起上つて、逃さうとしました。けれども、脹れた足が痛むので、彼女は膝を突いて、悲しげに歎きました。タッドは彼女を抱き、ポーは彼女の手優しく接吻しました。すると、蜜蜂姫は元氣が出ました、一寸法師どもの思ひやりの深い事が分つたのです。

ピックは無邪氣な顔をして蜜蜂姫を眺めました、蜜蜂姫は一寸法師がみんな思ひやりの深いのを見て、かう云ひました――

「一寸法師さん、あなた方がそんなに醜いのはお氣の毒ですね、私はあなた方を可愛がつてあげますから、どうか何か喰べる物を下さい、私は空腹いんです。」

「ポップ。」と一寸法師どもが一齊に叫びました、「行つて、喰物を持つて來い。」

と、ポップが鳥に乗つて飛んで行きました。所が、一寸法師どもは蜜蜂姫が醜いと云つたのを根に持ちました。ルックは非常に腹を立てました。ピックは腹の中で考へました、「この兒はまだほんの子供だから、おれの眼の中に輝いてゐる天才の光が見えないんだ、この光はおれの眼に碎く力を與へると同時に可愛い優しさを與へてゐるのだ。」

ポーは腹の中でかう考へました、「おれたちを醜いなんて云ふこの女の子を起さなければなかつた。」が、タッドはにこ／＼してかう云ひました――

「お嬢さん、あなたが私たちをもつと愛して下されば、私たちが醜く見えないやうになるでせう。」

彼がかう云つてゐる時に、ポップは鳥に乗つて歸つて來ました。ポップは黄金の盆の上に七面鳥の焼肉や、オートミール菓子や、クラレット水の壺を載せて持つて來ました。ポップは蜜蜂姫の足下にこの朝飯を置いてか

ら、そこいらを跳廻りました。

「一寸法師さん。」と蜜蜂姫が云ひました、「大變旨しい御飯でございませう。私の名は蜜蜂姫と云ひます、これからみんなで兄さんを探しに行ませう、そしてお母さんが心配して待つてゐらつしやるからみんなでクラリードへ歸りませう。」

が、親切な一寸法師のディックは、蜜蜂姫が歩けないだらうといふ事や、兄さんは大きいから自分で道を探すだらうといふ事や、この國では野獸はみんな退治されてしまつたから兄さんは災難に出遭はないといふ事を話して聞かせました。

「これからみんなで擔架を作りませう。」とディックは云ひました、「そして葉っぱや苔を敷いてその上へあなたを載せ、山へ連れて行つて、一寸法師の王様へあなたを贈物にしませう、これは私たち小人國の習慣です。」一寸法師はみんなこの説に賛成しました。蜜蜂姫は痛い足を跳めて、

黙つてゐました。この地方には野獸がゐないと聞いて蜜蜂姫は嬉しく思ひました。兎に角、蜜蜂姫は一寸法師どもの親切な事を信用しました。

一寸法師どもはもう一生懸命で擔架を作りにかゝりました。斧を持つてゐる一寸法師は二本の樅の若樹を切倒しました。ルッグは初めは自分が云つた説を考へ出しました。

「擔架の代りに籠を作つたらどうだ。」とルッグが又もや言ひ張りました。しかし、みんなは異口同音に反對しました。タッドはルッグを睨みつけました。

「ルッグ、お前は一寸法師でなくして人間に似てゐるぞ。」とタッドが云ひました。「だが、一番悪い一寸法師が一番馬鹿な一寸法師だといふ事は、わが小人國のせめてもの名譽だ。」

一方では、擔架が出来上りました。一寸法師どもは空中へ飛上り、一跳ねで枝を折つて来て、巧みにその枝で籠椅子を編みました。彼等は昔

や葉つばを椅子に敷き、その上へ蜜蜂姫を載せ、二本の棒を掴んで、それを肩の上に昇ぎました、そして、山の方へ昇いで行きました。

十

一寸法師どもは樹の茂つた丘の坂道をうね／＼と上つて行きました。

そちこちの丈の低い棚の樹の葉の中から、風に吹かれて落ちる丸い花崗石が轉がり出しました、青い溪のある暗紫色の山はこの未開の土地へ人を入れないために作つた壁壑のやうでした。

一行は、羽の生えた馬に乗つてゐるボッグを先頭にして、懸釣子の一面に生えてゐる岩の割目を通りました。黄金の髪を肩の上に靡かした蜜蜂姫は附近の山々の景色が白み初める曙のやうに見えました、それは曉方がいつでも怖ろしく感ぜられるからで、曉方にはいつも彼女が母親を呼んで、逃げやうとする事を思ひ出したからです、岩の間をうね／＼し

てゐる道に沿うて、「武装に身を固めた矮人ともが待伏してゐるのをちらと見た時、蜜蜂姫は母親を呼んで、逃げやうとしたのでした。

彼等は弓や槍を持つて、身動きもせず立つてゐました。野獣の皮で作つた上衣や、帯にぶら下げてゐる長いナイフは、彼等を恐ろしく見せました。鳥や獸の獲物が彼等の傍に横はつてゐました。けれども、この小さな獵人たちも、その顔を見るとそんなに物凄くはないのでした、否、物凄いと云ふところではなく、森の一寸法師にそっくりで、優しくて眞面目に見えるのでした。

彼等の中央に一番凛々しい一寸法師が立つてゐました。彼は耳の上に雄鶏の羽を着け、頭に大きな寶石を鑲めた冠をかぶつてゐました。そのマントは肩まで捲り上つて、金の飾環をはめた逞しい腕を出してゐます。帯には象牙の角と彫刻した銀金具を下げてゐます。彼は泰然として左手に槍を持ち、左手を眼の上にかざして蜜蜂姫の方を眺めました。

「ロック王陛下。」と森の一寸法師どもが云ひました、「きれいな女の子を見附けましたので、連れて参りました。この兒は名前を蜜蜂姫と申しま

す。」
「よく連れて來た。」と一寸法師のロック王が申しました。「その女の子は小人國の習慣に従つて、吾々の間で暮らすがよからう。」

「蜜蜂姫。」とロック王は蜜蜂姫に近づいて云ひました、「よく來ました。」
ロック王は優しい物言ひをしました、王は蜜蜂姫を大變懐かしく思つたのでした。王は爪先を立てて丈を高くして腰に垂れてゐる蜜蜂姫の手に接吻しました、そして自分は蜜蜂姫に少しも害を加へないから安心しろ、害を加へるところか、蜜蜂姫の云ふ通りにする、頸飾や、鏡や、カシユミア織や、支那絹が欲しいのなら與つてもいゝ、と云ひました。

「私は靴が欲しいわ。」と蜜蜂姫が云ひました。そこで、王は岩の上にぶら下つてゐる青銅の盤を槍で叩きました、すると、その途端に、洞窟

の奥から何者か、球のやうに轉がり出しました。その球は見る／＼大きく
なつて、一寸法師になりました。皮の前掛をかけてゐる所を見ると、

それは靴屋でした。その一寸法師は靴屋の親方なのでした。

「ツルツク。」と王が云ひました。「倉から一番柔かい鞣皮を出し、金銀の布
を持つて来い、それから道具係の所へ行つてきれいな海で採つた眞珠を
百粒貰つて来い、その鞣皮と、布と、眞珠で、蜜蜂姫のために靴を造つ
てくれ。」

王の言葉を聞くと、ツルツクは蜜蜂姫の足下へ身體を投倒して、念入
りに寸法を計りました。

「小さなロック王さん。」と蜜蜂姫が云ひました。「その靴を直ぐに拵へて
下さい、私は、靴が出来たらクラリードのお母様の所へ歸らなくちや
ならないんですから。」

「靴は直ぐ出来きます。」とロック王が答へました。「靴が出来たら、それを穿

いてクラリードへ歸らずに山を散歩なさい、お前さんはもうこの國から
何處へも行つてはなりません、こゝにゐるうちに、私はお前さんにこの
世ではまだ誰も知らない不思議な術を教へてあげませう。一寸法師は人
間より優れてゐるのです、お前さんが一寸法師の仲間へ来た事は大變な
仕合せです。」

「不仕合せだわ。」と蜜蜂姫が答へました。「ロック王さん、私にお百姓の穿
くやうな木靴を下さい、そして私をクラリードへ歸らして下さい。」

しかし、ロック王はそれは出来ないと言つて頭を振りました。すると、
蜜蜂姫は兩手を握り締めて、機嫌を取るやうに云ひました。

「ロック王さん、私を歸らして下さい、さうすれば私はあなたの御恩を忘
れません。」

「お前さんは明るい國へ行つたら私を忘れてしまふでせう。」

「ロック王さん、決してあなたの事を忘れません、「飛風」を愛するやうに

あなたを愛します。」

「その「飛風」といふのは誰の事です？」

「私の乳色の馬です、薔薇色の手綱が附いてゐてね、私の手の上にある物を喰べるんですの。「飛風」がまだ小さかつた時には、侍士のフランクールが毎朝「飛風」を私のお部屋へ連れて来ました、私は「飛風」に接吻してやつたのよ。でも、近頃はフランクールは羅馬にゐるし、「飛風」は大きくなつて階段を上れないの。」

ロック王は微笑みました。

「お前さんは「飛風」よりも私の方を愛するかね？」

「愛してよ。」と蜜蜂姫が云ひました。

「よろしい。」とロック王が云ひました。

「愛してよ、でも、今は愛さないわ、憎むわ、お母様やジョージさんに會はしてくれないんですもの。」

「そのジョージと云ふのは誰です？」

「ジョージさんはジョージさんだわ、私はジョージさんを愛してるの。」

ロック王は僅かの間に蜜蜂姫を大變よく思ふやうになりました、王は蜜蜂姫が大きくなつたら結婚をして、蜜蜂姫の媒介で人間と一寸法師と和睦をしようと思ひましたので、ジョージがやつて来て、王の計畫を壊しはしないかと怖れました。それがために、王はジョージの事を聞くと眉を蹙めて顔を反け、心配さうに頭を垂れたのです。

蜜蜂姫はロック王を怒らしたと思つたので、靜かに王のマントを引張りました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫は優しい悲しげな聲で云ひました、「どうして私とあなたはお互に不仕合せになつたのでせう？」

「物事はそんなものだ。」とロック王が答へました。「私はお前さんをお母様の所へ歸へす事は出来ないが、お母様の所へ夢を送らう、その夢を見

るとお母様はお前さんの運命が分るのだ、そしてお母様は慰められるのだ。」

「ロック王様。」と蜜蜂姫は泣顔に微笑を浮べて云ひました、「それは良い考ですわ、では、かうして頂戴。お母様の所へ毎晩私に會つてゐる夢を送つて下さい、そして私の所へは毎晩お母様に會つてゐる夢を送つて下さい。」

ロック王はさうすると約束しました、そして約束通りにしました。蜜蜂姫は毎晩お母様に會ひました、お母様は毎晩娘に會ひました、かうして、二人は幾らか満足しました。

十一

小人國は非常に深く、地球の下の大部分はその領土でした。そちこちの岩の隙間から空を覗くだけであるにも拘らず、この地下の王國は、道

路でも、並木路でも、宮殿でも、廊下でも、眞の間ではありません。僅かな空地と洞窟だけは眞闇でした。その他の場所は、ラムプも炬火もなく奇妙な幻のやうな光を放つ星に照らされてゐます、この光が驚く可き不思議な光景を照らして見せるのです。固い岩を切つて建てた素晴らしい大きな建物がありません、或る場所には、花崗石の非常に高い宮殿があつて、その窓はこの大きな洞窟の圓天井の下の霧の中で見えなくなつてゐますが、月よりもやゝ光の弱い小さな星が橙黄色の光をその霧の中へ投げかけてゐます。

この王國には非常な破壊力を持つた大きな砲臺や、半圓形の石段の座席と内側に彫刻を施した大きな井戸のある圓形劇場があります、その座席は一寸見てもどの位の長さがあるか分らないほど廣いもので、井戸は何處まで降りても底に達しないほど深いのです。これ等の建物は、この國の住民の身體に比較してさう見えるのかも知れませんが、それは兎も

角、すべての建物はこの奇妙な夢のやうな人民の才能を現はしてゐます。

一寸法師どもは羊齒の葉を刺した尖の鋭つた頭巾を冠つて、軽々とかういふ建物の周囲を跳廻るのです。彼等が街路の舗石の上から二階や三階へ飛上り、昔の彫刻にある偉人の顔のやうな真面目くさつた顔をして再びそこから球のやうに飛降りる光景は毎日何處でも見られます。

怠惰者は一人もゐません、みんな精を出して働いてゐます。全國到る所に槌の音が響いてゐます。機械の鋭い響が洞窟の圓天井に反響します、鑛夫や、鍛冶屋や、金泊屋や、寶石屋や、金剛石磨師の群が、手斧、槌、ピンセット、錐などを猿のやうに巧みに使つてゐる所は、實は珍らしい光景です。しかし、小人國にはもつと静かな場所もあります。

或る場所には、荒削りの岩で建てた、柱も岩で出来てゐる、太古の人間の住家のやうな家があります。或る場所には、門の低い宮殿が何處までも擴がつてゐます、これはロック王の宮殿です。

ロック王の宮殿の眞向ふに蜜蜂姫の家があります、それは家といふよりは寧ろ小舎で、間数は一間しかなく、四方に白モスリンの布が掛けてあります。家具は松の木で出来てゐるので、松の香が部屋中に漂つてゐます。細い日の光が岩の隙間から射し込み、夜は星が見えます。

蜜蜂姫には特別の従者は附いてゐませんでした、一寸法師がみんなで熱心に用を足してくれるのです、地上へ歸へす事のほかはどんな頼みでも肯いてくれるのです。

小人國の深い秘密を知つてゐる一番物識りの一寸法師どもは喜んで蜜蜂姫に物を教へました、一寸法師は字を書きませんから書物で教へるのではなく、山や野に生えてゐる草、いろいろの動物、土の中から掘出す種々の寶石などを見せて教へるのです。一寸法師どもは、無邪氣にかういふいろ／＼の不思議な物を見せて、自然の不思議や物を拵へる方法を彼女に教へるのです。

彼等は地球上のどんな金持の子供でも持つてゐないやうな玩具を蜜蜂姫に與へました、一寸法師ともはいつも働き者で、不思議な道具を發明するのでした。彼等は蜜蜂姫は上品できれいな身振をして動く人形を拵へてやりました。その人形を小さな舞臺（その道具立は海岸や、青空や宮殿や、お寺を現はしてゐます）の上に置くと、いろいろのお芝居をするのです。大きさは人間の腕ほどですが、お目出度い老人もあり、若い男もあり、白い着物を着た美しい娘もあります。

中には無邪氣な子供を抱きしめてゐるお母さんの人形もありました。そしてかういふ人形が、本當に憎み、愛、野心などといふいろいろの氣持で動いてゐるやうに身體を働かせるのです。非常に巧みに悲んだり喜んだりします、まるで生きてゐるやうに泣いたり笑つたりするのです。蜜蜂姫はそれを見ると思はず手を叩きました。蜜蜂姫は亂暴な王様になつた人形を見ると恐くなりました。それとは反對に、以前は王女であつた

が、今は野蠻人に虜はれてゐる寡婦が、自分の子供を救ふために夫を殺したその野蠻人と結婚をする所を人形が演ると可哀相で可哀相で耐らなくなりしました。

蜜蜂姫はこの人形の芝居を見てゐると決して疲れませんでした。一寸法師ともは音樂會を開きました、琵琶や、大提琴や、セオルポー（琵琶の樂器）や、立琴や、その他いろいろの樂器を弾く事を蜜蜂姫に教へました。蜜蜂姫は立派な音樂家になりました、そして舞臺で人形の演ずる芝居は、彼女に人間の事や世の中の事を教へました。ロック王はいつも芝居や音樂會に出ましたが、蜜蜂姫よりほかには何にも見ませんでした。王はだん／＼と蜜蜂姫に心を引かれて行きました。兎角するうちに何年となく月日が経ちましたが、蜜蜂姫はやはり一寸法師の所にゐました、そして年中一寸法師に慰められ、年中地上を戀しがつてゐました。蜜蜂姫は美しい娘さんになりました。彼女の容貌は不思議な運命に出遭つてゐる

ために何處か變つた所がありました、が、それがために彼女は一層美しく見えるのでした。

十二

蜜蜂姫が一寸法師と一緒に暮らすやうになつてから、六年の月日が夢のやうに経ちました。ロック王は蜜蜂姫を宮殿に呼び、壁にはめた大石を取除けよと寶物係に命じました。大石は一寸見ると壁に塗り込んであるやうに見えますが、實際は軽るくはめてあるだけです。三人が大石のはめてあつた穴をくいると、そこは人が二人並んで立つ事も出来ぬ狭い岩の割れ目でした。ロック王は先きに立つて薄暗い道を進みました、蜜蜂姫は王のマントの端を捉へて隨いて行きました。三人は暫らく歩いて行きました、時々兩側の岩が身體に迫つて來て、蜜蜂姫はもう進む事も退く事も出来なくなり、このまゝこゝで死んでしまふのではないかと思つて

慄然としました。彼女の前には暗い狭い道に沿うてロック王のマントがひらひらしてゐます。とうとうロック王は青銅の扉の所へ來ました、王が扉を開けると、中からさつと光が射しました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が云ひました、「光がこんなにきれいなものだとはい今まで知りませんでした！」

すると、ロック王は蜜蜂姫の手を引張つて光の射してゐる大廣間へ連れて入りました。

「御覽！」と王が叫びました。

蜜蜂姫は目が眩んで何にも見えません、高い大理石の柱の聳立つてゐるその大廣間は床から屋根まで黄金の光でびか／＼輝いてゐるのです。金銀と煌く寶石とを鑄めた高い臺があつて、それへ昇る階段には目も覺めるやうな刺繍をした敷物が敷いてあります、臺の端には象牙と黄金で出來た玉座があつて、半透明の瑠璃の天蓋で蔽はれ、兩側には三千年

を経た椰子の老木が二本立ち、小人國の昔の大美術家が彫刻した大花瓶が置いてあります。ロック王は玉座に上つて、自分の右側に立てと蜜蜂姫に命じました。

『蜜蜂姫。』とロック王が云ひました、『これが私の寶物だ。何でもお前さんの好きなものをお取り。』

柱から大きな黄金の楯がぶら下つて、太陽の光線を反射してゐます、劍や槍の尖はどれもみな炎のやうに輝いてゐます。

周囲の壁に沿うて並んでゐる卓子の上には、大洋盃、平饌、水瓶、杯、聖餐器、皿、臺附杯、黄金の洋盃、銀の環の附いた象牙の洋盃、水晶の大饌、彫刻した金銀の皿、金櫃、お寺の形をした聖骨函、香函、鏡、材料も細工も共に美しい枝附燭臺と炬火臺、怪物の形をした香爐などがありました。一つの卓子の上には、月長石で刻んだ將棋盤と棋子がありました。

『お取り。』とロック王が繰返して云ひました。

が、蜜蜂姫はこの寶物の上の方を見上げると、屋根の隙間から青空が見えました、そしてこの寶物も日の光があればこそ立派に見えるのだといふ氣がして、かう云ひました。

『ロック王さん、私は地上へ歸りたくなりました。』

すると、ロック王は寶物係に相圖しました、寶物係は重い壁布を上げて、鐵の筐をはめ、同じ鐵の蓋をした大きな箱を出しました。箱の蓋を開くと何百といふいろく種々の光が射しましたが、その光の一つ一つは極く見事に彫刻した寶石から出てゐるのです。ロック王は兩手で澤山の寶石を掬ひ上げました、と、紫水晶、三種類の碧玉、その一つは暗綠色で、その一つは蜜色をしてゐるのでハネー・エメラルドと云ひ、今一つは青の勝つた綠色で一名綠柱玉と云つてそれを持つてゐると良い夢を見ると云ふ玉、それから東洋の黄玉、勇者の血のやうに美しい紅玉、男の

青玉と呼ばれてゐる暗青色の青玉、女の青玉と呼ばれてゐる青白い青玉、波光玉、風信子石、ユークラス、土耳其玉、曙よりも和かな光を持った蛋白石、藍緑玉、シリアの石榴石などから發するさまざまの光を放ちました。これ等の寶石は非常に清らかなよく輝く光澤を持つてゐました。そしてこの寶石の真中に大きな金剛石が眼も眩い白い光を放つてゐました。

「お取り、蜜蜂姫。」とロック王は云ひました。けれども、蜜蜂姫は頭を振りました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫は云ひました、「こんな寶石よりもクラリードの屋根に落ちる一筋の日光の方が私にはいゝのです。」

すると、ロック王は眞珠ばかり入つてゐる今一つの箱を開けるやうに命じました。その眞珠は丸くてきれいでした、その光は海と空のあらゆる色を反射してゐるやうに見えました、その光澤は愛を現はしてゐるやうに優しいのでした。

「これをお取り。」とロック王が云ひました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が答へました、「この眞珠はブラシユランドのジョーヂさんの眼のやうです、私はこの眞珠が好きです、でも、これよりジョーヂさんの眼の方がもつと好きです。」

この言葉を聞くと、ロック王は顔を反けました。しかし、王は三番目の箱を開けて、太古から一滴の水を封じ込めてゐる水晶を見せました、水晶を動かすと水の動くのが見えるのです。王は又何十年の間數匹の昆虫を封じ込めてゐる黄ろい琥珀を出して見せました。昆虫の細い足やきれいな觸角がはつきり見えます、まるで生きてゐるやうで琥珀を懐いたら飛出すだらうと思はれるほどです。

「これは非常に珍しいものです、これをお前さんに上げます。」

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が答へました、「琥珀も水晶も保存つてお置き

なさい、私がこれを持つてゐたら、この水や昆虫を自由にしてやりたくて耐らなくなるでせう。』

ロック王は暫らの間黙つて蜜蜂姫を眺めてゐましたが、やがてかう云ひました、「蜜蜂姫、どんな立派な寶物でもお前さんが持つてゐれば大丈夫だ。お前さんが寶物を持つてゐるので、お前さんが寶物に持たればしないだらう。吝嗇漢は自分の持つてゐる黄金の餌食だ、お金を輕蔑してゐる人だけが偉い金持になれるのだ、その人の精神はその富よりも立派なのだ。』

ロック王はかう云つて寶物係に相圖をしました、寶物係は黄金の冠を布團の上に載せて蜜蜂姫の方へ差出しました。

『吾々があなたを敬つてゐる徴としてこの冠を受けて下さい。』とロック王が云ひました。「あなたはこれから「小人國の王女」と呼ばれるのです。』

かう云つて、王は手づから蜜蜂姫の頭へ冠を載せました。

十三

一寸法師どもは小人國の最初の王女の戴冠式を祝ふために陽氣に騒ぎました。罪のない無邪氣な芝居が交る／＼大きな圓形劇場で演ぜられました。一寸法師どもは羊齒の花や二枚の瓣の葉を氣取つて頭巾に刺し、樂しげに地の下の道路を踊り歩きました。お祝ひは三十日間續きました。この大騒ぎの間、ビツクは昂奮してゐました、親切なタッドは騒ぎに酔つてゐました、優しいデミックは涙を流して喜びました、ルグは夢中になつて又もや蜜蜂姫を籠に入れなくちやならぬなどと云ひ出しましたが、一寸法師どもはもう今度こそは美しい王女に逃げられる悞はないのです、鳥に乗つてゐるポップは喜びの餘り大聲を張り上げましたが、黒い鳥もあたりが陽氣なので浮かれ出し、ガア／＼ガア／＼と矢鱈に啼きました。

ロック王だけは悲んでゐました。

三十日目に、王女と小人國の人民が今までにない立派な宴會を催はしたので、ロック王は玉座に昇り、王女の直ぐ傍に立ちました。

「王女蜜蜂姫。」と王は云ひました、「私はあなたに一つお願ひしたい事がある、それを承諾して下さるか断るかは全くあなたの自由です。クラリードの蜜蜂姫、小人國の王女、あなたは私の妻になつてはくれませんか？」

かう云ふと、眞面目な優しいロック王が、何處となく立派な犬のやうな優しさと美しさを帯びました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が王の髻を引張りながら云ひました、「私は戯談にならあなたの奥様になりますけれど、本當の奥様になるのは嫌です。あなたがそんな事を云つたので、私はフランクールがよく私に話してくれたあの滑稽なお話を思ひ出しました。」

この言葉を聞くと、ロック王は顔を反けましたが、蜜蜂姫は王の眼に涙が浮んでゐるのを見脱しませんでした。そこで、蜜蜂姫は氣の毒な事をしましたと思ひました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が云ひました。「私はあなたを愛してよ、あなたは一寸法師のロック王さんですからね、若しあなたがフランクールのやうに私を笑はせたら、あなたは何もそんなに苦い顔をする事は要らないのよ、フランクールはそれは歌をうたふのが上手なの、そしてあの白髪と赤鼻がなかつたら、フランクールはそれは美しい男でしたらうよ。」

「クラリードの蜜蜂姫、小人國の王女。」とロック王が云ひました、「私はいつかあなたが私を愛するやうになるだらうと思つてあなたを愛してゐるのです、いや、そんな事を考へなくとも、私はあなたを愛さずにはゐられない。どうか今迄の交誼として、あなたはいつでも私に對して正直であつて下さい。」

「ロック王さん、それは私約束してよ。」

「宜しい、では、蜜蜂姫、本當の事を云つて下さい、あなたは結婚しようと思つて誰かを愛してゐますか。」

「ロック王さん、そんな事を思つて私が愛してゐる人は誰もないわ。」

すると、ロック王はニコムとして、黄金の杯を手につけて、響き渡るやうな聲で小人國の王女の健康を祝しました。大きな吼えるやうな聲が地の底から起りました、それは宴會の食卓が小人國の端から端まで續いてゐたからです。」

十四

蜜蜂姫は王女の冠を頂いてから、髪を肩の上に乗らしてゐた頃よりも悲しくなり、度々物思ひに沈むやうになりました。笑ひながら鍛冶場へ行つて、人の好いビツクや、タッドや、ディッグの髯を引張ると、彼等は炎

のために赤くなつた顔に向けて快活に彼女を迎へてくれたものですが、あの頃の方が今よりもつと楽しかつたのでした。彼女の前で膝を突いて踊り、彼女を蜜蜂姫と呼んでゐた人の好い一寸法師どもは、今では、その傍を通ると頭を下げて、畏つて黙つてゐるだけです。蜜蜂姫はもう子供でなくなつたので悲しいのでした、小人國の王女になつたので苦しいのでした。

一寸法師のロック王が自分のために泣いたのを見たので、蜜蜂姫はもう王に會ふのが嫌になりました。けれども、王は人の好い不仕合せな人でしたから、彼女は王を愛してゐました。或る日（小人國に日があると云つていかどうか分りませんが）蜜蜂姫はロック王の手を取つて岩の隙間へ連れて行きました、そこからは日光が射して、光の中で黄金の埃が舞踊をしてゐました。

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が云ひました、「私は苦むでゐます。あなたは王

様です、その王様が私を愛してゐると云つたので、私は苦むでゐます。美しい娘がかういふのを聞くと、一寸法師のロック王は答へました——
「私はあなたを愛してゐます、クラリードの蜜蜂姫を愛してゐます、小人國の王女を愛してゐます、ですから、あなたを吾々の國へ閉籠めて吾々の秘密を教へたのです、吾々の秘密は地上の人間世界で知る事の出来る秘密よりももつと大切なもつと不思議な秘密です、それは人間は一寸法師よりも不器用で學問がないからです。」

「えい。」と蜜蜂姫が云ひました、「でも、私は人間で一寸法師ではありません。だから、私は人間の方を餘計に愛するのです。ロック王さん、私の死ぬのがお嫌でしたら、もう一度私をお母様に會はして下さい。」

ロック王は返答をせずに行つてしまひました。蜜蜂姫は獨りぼつちで淋しさに日光を眺めてゐました、日光は自然を遍く照らし、有りとあらゆる生物を、路傍の乞食をさへも、その輝やく浪で包むでゐます。その

日光がだん／＼と青ざめ、その金色の輝やさが色褪せて青白い色に變りました。夜が地上に來たのです。星が一つ瞬いてゐるのが岩の隙間から見えます、

と、誰か静かに彼女の肩に觸つたので振り返つて見ると、ロック王が黒い外套に身體を包んで立つてゐるのです。王は手に持つてゐた今一つの外套を蜜蜂姫にかけてやりました。

「お出でなさい。」と王は云ひました。

王は蜜蜂姫を下界から連れ出しました。久し振りで風に揺れる樹や、月にかゝつた雲や、爽かな青い夜の美を見た時に、久し振りで牧草の香を嗅ぎ、子供の頃吸つた空氣を胸一杯に吸つた時に、蜜蜂姫は深い溜息を吐き、嬉しさのあまり死ぬかと思はれるほどでした。

ロック王は蜜蜂姫を抱へてゐました、王は身體は小さいのに羽根のやうに軽く蜜蜂姫を運んで行くのです、二人は二匹の鳥の影のやうに地面の

上を迂りました。

「蜜蜂姫、あなたはやがてお母様に會へます。が、私の云ふ事をよく心に留めて置いて下さい。あなたも知つてゐる通り、私は毎晩お母様の所へあなたの姿を送つてゐました。お母様は毎晩あなたの懐かしい幼を見てゐるのです。お母様はその幻を見て微笑み、その幻と話をし、その幻を可愛がつてゐるのです。所が、今晚は本物のあなたに會ふのです。あなたはお母様を見ても決して話をしてはいけません、さうでないと、魔術が利かなくなつて、今後お母様は本物のあなたもあなたの幻も見られなくなつてしまふのですよ、お母様は今本物のあなたとあなたの幻とが見分けられないのですからね。」

「それでは、氣を附けませう、あ！ ロック王さん！……御覽なさい？
御覽なさい！……」

丘の上に黒く見えるのは確かにタラリードの物見の塔です。蜜蜂姫は

懐かしい古壁に接吻を送る暇もなく、紫羅蘭花の一面に咲いたタラリードの町の砲臺を飛ぶやうに過ぎました、彼女はもう草の間に螢の光つてゐる臺地を昇つて、裏門にさしかかりました、ロック王は苦もなく門を開けました、一寸法師は金属の主ですから、錠前でも、海老錠でも、門でも、鎖でも、棒でも彼等を防止める事が出来ないのです。

蜜蜂姫はお母さんの部屋へ行く螺旋階段を登りました、そして動悸を打つ胸を両手で押へるために立停りました。戸は静かに開きました、と、蜜蜂姫は天井から下つてゐるラムプの光で、森と押鎖つた静寂の中にお母さんがゐるのを見ました、お母さんは痩せて顔色が悪く、額の髪は灰色になつてゐますが、娘の眼には以前自分が立派に着物を着て大びらで二階へ上つて来た頃よりも一段と美しくなつたやうにさへ見えるのでした。お母さんはいつものやうに娘を見て、抱うとして手を擴げました、すると、蜜蜂姫も笑つたり歎息いたりしながら、お母さんの擴げた腕の中

へ身體を投込なげこまうとしました、が、ロック王は蜜蜂姫を引戻ひきもどしました、そして一把の葉はを運ぶやうに、青い夜の景色の中を通つて、蜜蜂姫を小人國へ連れて歸りました。

十五

蜜蜂姫は下界の宮殿の花崗石の階段に坐り、岩の隙間から青空を眺め、接骨木の樹が白い傘を擴げて日光を遮つてゐるのを見ました。蜜蜂姫は泣き出しました。

「蜜蜂姫。」と一寸法師のロック王が彼女の手を取つて云ひました、「何故泣くのですか、どうしたいのですか？」

蜜蜂姫が近頃嘆き悲んでゐるので、一寸法師どもはその足下で、笛、箏、三味線、饒鉞などを奏して蜜蜂姫を陽氣にさせやうと努めました。又他の一寸法師は蜜蜂姫を慰めるために、交る／＼宙返りをして見せま

した、彼等は宙返りをしたがら葉つばの飾りの附いた頭巾の尖で草をちよいと突くのです、髯の生えた小男どもが跳ね廻るのを見てゐるほど面白い事はありません。親切なタッドや、伶俐なデッグは湖の岸に蜜蜂姫が眠つてゐるのを見附けて以來、彼女を愛してゐるのですが、二人は老詩人のやうなビクと共に、靜かに彼女の腕を取つて、何をそんなに悲んでゐるのか自分たちに打明けてくれと頼みました。人の好い正直者のポーは葡萄の籠を彼女に與へました、そしてみんなで蜜蜂姫の裾を引張つてゐると、ロック王がかう云ひました――

「蜜蜂姫、小人國の王女、あなたは何故泣くのですか？」

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が答へました、「それから一寸法師の皆さん、あなた方は御親切だから、私が泣いてゐるとますます／＼私を可愛がつてくれるのですね、私と一緒に泣いてくれるのですね、私はブランシュランドのジョーヂさんの事を思ひ出すと悲しくなるのです、ジョーヂさんはもう立

派な騎士になつたでせうが、私はもうあの人に會ふ事が出来ないのです。私にはあの人を愛してゐます、あの人の奥様になりたいのです。」

ロック王は握つてゐた手を放しました。

「蜜蜂姫。」とロック王が云ひました、「あなたは私に嘘を吐いたのですね、宴會の時あなたは私より他の人を愛しないと云つたではありませんか。」

「ロック王さん。」と蜜蜂姫が答へました、「私は宴會の時あなたに嘘を言ひませんでした。あの時はブランシュランドのジョージさんと結婚したいとは思はなかつたのですが、今ではジョージさんが私と結婚しようと言つてくれ、ばい」と心から願つてゐるのです。けれども、あの人はそんな事を云はないでせう、私にはあの人が、何處にゐるか知らないし、あの人は私に何處にゐるか知らないんですもの。だから、私は泣くのです。」

この言葉を聞くと、一寸法師どもは音楽を止めました、輕業をやつてゐた連中は宙返りを止めて身動きもせず立つてゐました、タッドとデイ

グは蜜蜂姫の袖の上に涙を流し、人の好いボーは葡萄の籠を落しました。そしてすべての一寸法師が怖ろしい呻聲を出しました。

見事な寶石を鑲めた冠をかぶつたロック王は誰よりも悲しさうに黙つて、マントの裾を紫色の水の流れのやうに後に引いて、行つてしまひました。

十六

一寸法師のロック王は、自分の氣の弱いのを蜜蜂姫に見られたくなかつたのでした、けれども自分獨りになると、王は地上に坐つて、足を掴んで嘆き悲みました。ロック王は嫉妬をやいたのでした。

「蜜蜂姫はあの男を愛してゐる。」とロック王は獨言を云ひました、「そしてこのおれを愛してゐないんだ！しかし、おれは王様だ、おれは賢明だ。おれは澤山の寶物を持つてゐる、おれは驚くべき秘密を知つてゐる、お

れは一寸法師どもの頭だが、その一寸法師は人間よりも偉いんだ。蜜蜂姫はおれを愛しないで一寸法師より學問のない若い男を愛してゐるのだ。蜜蜂姫は人間の値が分らないのだ——あまり智慧がないのだ。蜜蜂姫の物の分らないのは可笑しい、だが、おれは彼女を愛してゐる、彼女がおれを愛しないから、おれはもう何をやる氣もなくなつた。」

ロック王は毎日々々極く淋しい山道をぶらついて、悲み嘆いたり、又時とすると悪い考を抱いたりしました。ロック王は蜜蜂姫を牢屋へ入れて食物を與らないで、無理に彼女を妻にしようかとまで考へました。けれども、かういふ悪い考は直ぐに棄てしまつて、蜜蜂姫の處へ行つて、彼女の足下に身を投げ倒さうと決心しました。が、結局どうしていゝか分らなくなつて、全く途方に暮れました。蜜蜂姫がロック王を愛しないのは王の故ではないのでした。

かう思ふと、王はブランチユランドのジョーヂが憎くなりました。ジョー

ヂが魔術使のために遠くへ送られて行つてしまへばいゝと思ひました、そして兎に角、ジョーヂに蜜蜂姫の愛を聞かしてはならないと思ひました。「おれはまだ老人ではないが、今まで永い間苦みといふもの知らなかつた。たとへ苦んだにしても、その苦みは近頃の苦みと比べるとお話にならない。今迄の苦みにはその底に何かしら優しい甘いものがあつたが、近頃の苦みは卑しくて苦味を持つてゐる。おれの心は淋しい、おれの眼に浮ぶ涙は眼を焼く酸のやうだ。」

ロック王はかう考へました。嫉妬のために自分の考が邪惡になるのを怖れて、ロック王は蜜蜂姫に會ふのを避けました、弱くて獸のやうな人間の言葉を蜜蜂姫に對して心にもなく使ふのを怖れたのでした。

或る日、ロック王は蜜蜂姫がジョーヂを愛してゐるといふ考にいつもより苦められたので、深い井戸の底に住んでゐる小人國の一番の學者ニールに相談して見ようと決心しました。この井戸の中は氣候が平穩でし

た。二つの小さな星と、青白い太陽と、赤い月が交る／＼方々を照らすので、暗くもありませんでした。ロック王が井戸の底へ降りて行くと、ニールは實驗室にゐました。ニールは一見親切な老人で、頭巾に麝香草の小枝を付けてゐました。ニールは學者でしたが、その性質は他の一寸法師と同じく無邪氣で正直でした。

「ニール。」と王はニールを抱いて云ひました、「お前さんは物識りだから、お前さんに相談しようと思つてやつて来た。」

「ロック王陛下。」とニールが答へました、「私はかなりいろ／＼の事を知つてゐますが。馬鹿でございます。しかし、自分の知らない事を學ぶにはどうしたらいいかその方法を知る智慧を持つて居ります、それで私の學問がこんなに名高いのでございます。」

「宜しいでは、」とロック王が云ひました、「ブラシユランドのジョーデといふ若者が今何處にゐるか分るかね？」

「私は自分の知らうと思はなかつた事は分りません。」とニールが答へました、「私は人間が無智で愚かで、邪惡な事を知つてゐますから、彼等の云ふ事や爲す事に注意しません。ロック王陛下、人間の男は天から勇氣を授かり、女は美を授かり、子供は無邪氣を授かつて居りますので、この高慢な憐むべき種族も、幾分の値を持つてゐますものゝ、若しそれが無かつたら、人間といふものは全く慨はしい滑稽な動物でございます。吾々一寸法師は必要に迫られて勞働しますが、人間はこの神聖な法則を破りました、彼等は吾々のやうに心からの愉快な勞働者にならずに、働く時は戦争を選ぶのです、彼等はお互ひに助け合はずに、お互ひに殺し合ふのです。公平な眼で見れば、人間の生命の短い重なる原因は、彼等が無智で残酷だからだと云はなければなりません。あんまり生命が短いので、人間は如何に生き可きかといふ方法を學ぶ暇がないのです。地下に住んでゐる一寸法師の方が遙かに幸福で優れてゐるのです。吾々は不滅

ではありませんが、渺くとも、吾々をその胸に抱き、吾々を温めてくれる地球の生存へる限りは生存へるのです、所が、地球のギザ／＼の表面に生れた人種はどうかといふに、地球は或る時は焦がすやうな、或る時は凍るやうな騒々しい風を送るだけで、その風が忽ち人を殺したり生かしたりするのです。けれども、人間がかういふ不幸に出遭ひ邪惡な性質を持つてゐるお蔭で、或る人間の靈魂を一寸法師の靈魂よりも美しくする徳といふものが人間世界にはあります。が、ロック王陛下、この徳は眞珠の和かな光澤のやうに貴い憐愍です。徳は苦みによつて教へられるのですが、一寸法師は徳などといふものは知りません、一寸法師は人間よりも賢いから、苦みを逃れるのです。しかし、時とすると一寸法師は下界を出て、人間を愛せむとして無慈悲な地球の表面で人間の間に立交り人間と共に苦むのです、そして天から降る露のやうに靈魂を爽かにする憐愍を感ずるのです。ロック王陛下、これが人間の眞相です。ですが、陛

下は今或る人間の運命をお尋ねになりましたね？」

ロック王は又もや同じ質問を繰返しましたので、ニールは實驗室の中にあつた多くの望遠鏡の一つを覗きました。一寸法師は書物を持つてゐません、彼等の持つてゐる本はみな人間世界から来たもので、玩具として用ひられてゐるのです。一寸法師は人間のやうに紙の上へ印を書いたりなどして學問するのではなく、望遠鏡を覗いて、究めやうとしてゐる物體そのものを眺めるのです。たゞ六ヶ敷いのは、正しい望遠鏡を選んで焦點を間違へぬやう定める事です。

小人國には水晶の望遠鏡や、黄玉の望遠鏡や、蛋白石の望遠鏡がありますが、よく磨いた金剛石のレンズをはめたのが中でも良い望遠鏡で、非常に遠方にある物を見る事が出来るのです。

一寸法師どもは人間には分らない半透明の物質で作つたレンズを持つてゐます。このレンズは岩や壁を硝子のやうに透して向ふにある物が見

えるのです。更に驚く可きは、時が経つて消えて無くなつた物を鏡のやうにはつきりと映して見せるレンズのある事です。一寸法師どもは、洞窟の底にゐて、エーテルの無限の海から太古にあつた物の形や色を呼返す力を持つてゐます。一寸法師どもは嘗つて人間や、動物や、植物や、岩などに衝つて碎けた光の破片を再び整へて、過去の幻影を自分の手で造り出す力を持つてゐるのです。そして一寸法師がさういふ術を施すと、過去の人間や、動物や、植物や、岩が再び何世紀の間も無限のエーテルの中を飛廻るのです。

尊敬すべきニールは太古の物の姿を發見し、地球の出来ない前に住んでゐた動物の姿を現はす術が巧みでした。だから、ブラシユランドのジョーヂを見附けるのは、彼にはお茶の粉でした。ニールは極く有りふれた望遠鏡の一つを暫らく眺めてから、ロック王に向つてかう云ひました——。

「ロック王陛下、あなたが探してお出でになる若者は、一度入ると歸る事が出来ないといはれてゐる水魔の水晶宮にゐます、水晶宮の虹色の壁は陛下の王國に隣接してゐます。」

「彼は水晶宮にゐるのか。」とロック王は叫びました。「あすここにゐるがい——」と云つて王は手を擦りました。「面白く暮すがい。」

ロック王は尊敬すべき學者の一寸法師を抱擁して、大聲で笑ひながら井戸を出しました。

王は家に歸る途中腹を抱へて笑ひ續けました、頭を振り、髯を腹の上でゆらく揺りながら笑ひに笑ひました。ロック王はどんなに笑つた事でせう！途中で出遭つた一寸法師は貰ひ笑ひをしました。その一寸法師を見て又他の一寸法師が貰ひ笑ひをしました。笑聲が方々へ傳染して行つて、地球が揺れるほどの大笑ひになりました。はいはいはい！

一寸法師のロック王は直ぐに笑ひを止めました、王は悲しさうな顔を布團に埋めました。

王は一晚眠らずに水魔の虜になつてゐるブランシュランドのジョーヂの事を考へてゐました。

牛搾りの男が白い寢床に手を重ねて寝てゐるその妻の代りに牛の乳を搾りに行く時刻に、一寸法師のロック王は又もや賢いニユールを深い井戸の中に訪ねました。

「ニユール、お前さんはまだジョーヂが水魔と一緒に何をしてゐるか私に話さなかつたね。」

ニユールは王が狂人になつたのだと思ひました、しかし、ニユールはそれがために驚きはしませんでした、何故と云ふに若しロック王が氣が變に

なつたら、極く優しい、美しい、愛すべき、親切な狂人になる事を知つてゐたからです。一寸法師の狂人は温順しくて、微妙な空想に耽るのでした。

「ブランシュランドのジョーヂの事を話して貰ひたいのぢや。」と王は云ひました、ニユールはジョーヂの事はもう遮くに忘れてしまつてゐたのです。

そこで賢明なニユールは幾つかのレンズや鏡を王の前に置きました。すると王は鏡の中にブランシュランドのジョーヂが水魔に浚はれて行く時の姿をありくと見ました。ニユールは正しいレンズの選擇と、熟練したレンズの置方によつて、かの白蓋薇を見て死んだ伯爵夫人の倅の冒險の一伍一什を王の前に現はして見せました。一寸法師の王は本物と寸分違はぬ形や色を見たのですが、それを言葉に書いて見ると次ぎのやうになるのです。

ジョーヂが湖の少女たちの氷のやうな手で浚はれて行つた時水は彼の

眼や胸を押へつけて、彼は死ぬかと思ひました。が、ジョーヂの耳には断えず自分を撫でてゐるやうな歌が聞え、彼の全身は爽快になりました。眼を開くと、ジョーヂは虹のやうなきれいな色を反射してゐる水晶の柱がそゝり立つ洞窟の中にあるのです。洞窟の奥には、和かな光を放つ大きな真珠貝の臺の上に、珊瑚と海草で出来た水魔の女王の王座がありました。女王の顔は真珠や水晶よりもつと優しい光で輝やいてゐます。女王は侍女どもが連れて来た子供を見てにこ／＼しました、彼女の緑色の眼は長い間子供を見詰めてゐました。

女王はとう／＼口を開いてかう云ひました、「よく来ましたね、私の國にゐると、あなたは悲しい目を見ません。こゝには退屈な勉強も亂暴な遊びもないのです、辛い労働もありません、あなたはたい水魔の歌を聞き舞踊を見てゐればいゝのです。」

事實、緑色の髪毛をした女たちはジョーヂに音楽や、舞踊や、その他

多くの優美な遊びを教へてくれました。女たちはジョーヂの額に女たちの捲髪で飾つた海扇貝を結び附けるのを好みました。けれども、ジョーヂは故郷の事を思ひ出すと、焦々して握り締めた自分の手を噛みました。何年も経ちました、ジョーヂは再び地上に歸りたいものだと思はず憶れてゐました、彼は、太陽が物を焦がし雪が物を凍結せる氣候の烈しい地上へ、人が苦むだり愛したりしてゐる地上へ、蜜蜂や懐かしい母のゐる地上へ歸りたくて耐りませんでした。その幾年かの間に、ジョーヂは上唇の上に美しい黄金色の和毛の生えた丈の高い少年になりました。髯が濃くなると同時に勇氣が出て來ました、そこで、或る日、ジョーヂは水魔の女王の前に出て、頭を低く下げて、云ひました。「私はあなたにお暇を頂きたいと思つて來ました、私はクラリードへ歸らうと思ひます。」

女王はにこ／＼して答へました。

「私はあなたの願を聞届ける事が出来ません、と云ふのは、私はあなたを私の戀人にするために、この水晶宮であなたの番をしてゐるのだからです。」

「女王様、私はそんな名譽を得るほど値のある者ではございません。」とジョーヂが答へました。

「それは遠慮といふものです。どんな花やかな騎士でも貴婦人の氣に入るとは思へないものです。それに、あなたはまた年が行かないから、自分の値が分らないのです。私たちはみんなあなたの幸福を願つてゐるのです、あなたはこの女王にお従ひなさい、この女王だけにお従ひなさい。」

「女王様、私はクラリードの蜜蜂姫を愛してゐます、私は蜜蜂姫より他の婦人を愛しません。」

「憎い女だ！」と女王は眞青になつて(が、前より一段と美しくなつて)

叫びました、「人間の下品な娘だな、その蜜蜂姫といふのは！あなたはとうしてそんな女を愛するのですか？」

「どうしてだか分かりませんが、私はあの女を愛してゐるのです。」

「心配する事はない、今に何でもなくなつてしまひますよ。」

そして、水魔の女王は今でも水晶宮のいろ／＼の誘惑物をもつてジョーヂを虜にしてゐるのです。

ジョーヂは女といふものが謎のやうで分かりませんでした、彼は魔の城のタンホイゼル(中世紀傳説に現はるる騎士)よりもリコメデスの娘たちの間にゐるアキレス(希臘の有名なる大將)に似てゐました。ですから、彼は悲しげに、何處か逃路はないかと大きな宮殿の壁に沿うて追ひ歩きましたが、彼は自分の輝やく牢獄を封じ込めてゐる静かな大きい海を見ただけでした。ジョーヂは透明な水晶の壁を透して、花咲く菟葵葺や枝を擡げた珊瑚を見ました、石罫の細い莖やびか／＼光る貝殻の上には、紫や、青や、金色の魚が尾を動

かして水を星のやうにキラ／＼させてゐます。彼はこんな不思議な物にも氣を留めませんでした、彼は水魔たちの歌でいゝ氣持になつて、だんだんと自分の意志が碎け、自分の精神が弱くなつたのを感じてゐたからです。ジョーヂは無性になつて何事にも氣が引立ちませんでした、或る日彼は宮殿の廊下に豚の皮表紙の、大きな銅鋌を打附けた、磨切れた古い本があるのを不圖見附けました。この書物は大洋の真中で沈んだ船から拾上げたもので、その中には騎士道と美しい婦人の事が書いてありました、正義の愛と美とのために世界中を武者修業に廻り、悪人を矯し、寡婦を保護し、孤兒を救ふ勇者の冒険談が長々と書いてありました。ジョーヂはこの素晴らしい冒険譚を讀むと、驚異と、耻と、怒のために顔の色を赤くしたり青くしたりしました。彼はちつとしてゐられなくなりました。

ジョーヂは叫びました。

「私も華やかな騎士にならう。私も人類の幸福のために、蜜蜂姫の名に於て悪を凝らし、不幸な者を救ひに世界を巡歴しやう。」

ジョーヂは劍を引抜き、勇氣に充ちて、水晶宮の中を突進しました。白衣を纏うた女たちは逃げ出して、湖の銀の小波のやうに彼の前で氣絶しました。たゞ女王だけは泰然として彼の近づくのを見守つてゐました。女王は緑色の眼で氷のやうに冷やかに彼を見ました。

「おれを縛つてゐる魔術を破れ。」とジョーヂは女王の方へ走り寄りながら叫びました。「おれのために地上へ行く道を開け。おれは騎士のやうに太陽の光の中で闘ひたいのだ。人間が愛し、苦み、闘つてゐる所へ歸りたいのだ！おれに本當の生命と本當の光を返してくれ。おれの勇氣を返してくれ！返さなければ、お前を殺すぞ、この悪女奴！」

「この子供が！」と女王は云ひました。そしてジョーヂを牢屋へ投込むやうに命じました。牢屋は宮殿の下に造つた水晶の隧道で、その周圍には鉸

が三列の尖つた齒をもつた大きな顎をばつくり開けて、吼えてゐるので
す。鮫は今にも脆い硝子の壁を碎きさうに見えるので、この奇怪な牢屋
に入つた者は夜も眠る事が出来ないのです。

この海の下の隧道の端づれは大きな岩の上にあるのですが、その岩は
小人國の一番果てのまだ一寸法師どもが足を踏み入れた事のない洞窟の
天井になつてゐるのです。二人の一寸法師はたつた一時間ほどの間にこ
れだけの事を見ましたが、まるで彼等が毎日ジョージと一緒に居て、その
生活を見てゐたやうでした。ニールは怖ろしい牢獄の光景を見せて、ロッ
ク王に云ひました――

「ロック王陛下、私は陛下が見たいとおっしゃつたものをみんなお見せし
ました、これ以上はもうお見せするものがありません。御覽になつたも
のがお氣に召したかどうかは私の関係した事ではありませんが、私はた
だ御覽になつたものが眞實であればそれで満足します。學問は人が喜ば

うと悲まうとお構ひなしです。學問は不人情なものです。人を喜ばせた
り慰めたりするのは學問ではなくて、詩歌です。ですから、詩歌は學問
よりももつと必要なのです。さア、ロック王陛下、これからみんなに歌を
おうたはせなさいまし。」

ロック王は一言も口を利かずに、井戸を出ました。

十八

一寸法師のロック王は、智識の井戸を出ると、寶物庫へ行つて、一つの
箱（その箱の鍵は王だけしか持つてゐないので）から指輪を出して、
それを指にはめました。その指輪に鑄めた輝かしい光を放つ寶石は怖ろ
しい魔力を持つた石でした。ロック王は宮殿へ行つて旅行服に着換へ、重
い長靴を穿き、杖を持ちました、そして旅に出ました、王は人通の激し
い街路や、大きな本通や、村や、斑名の隧道や、石油の流れや、水晶の

洞窟を通りましたが、それはみんな互ひに狭い入口で繋がつてゐるのでした。

王は深い物思ひに沈んで、何かわけの分らぬ事を口走りました。が、王は一生懸命でコツ／＼と道を歩きました。山が行手を遮ると、王はその山を攀登りました。足下に断崖が開けると、王はその断崖を降りました、流を徒涉りし、硫黄の烟で眞黒になつた怖ろしい土地を横切りました。王は歩くと足痕の附く燃える溶岩を越えました、王の姿は疲れ果てた旅人になりました。王は物凄しい洞窟をくぐり抜けました、洞窟の中は海の水が滴り、その水は難破物の上を涙のやうに流れて、無数の貝殻が嫌らしい形に積重ねられてゐる凸凹の地面の上に池を作つてゐました。大きな蟹や、川蝦や、大蝦や、海蜘蛛が王の足の下でバチ／＼いふ音を發し、爪を後に残して匂ひ出すと、それに驚いて何百年も経つたかと思はれる氣味の悪い軟體動物や章魚の類が突然澤山の足をのたくり、鳥の

嘴のやうな口から臭い毒汁を吐出しました。しかし、ロック王は臆せずに進みました。王は槍や鋸のやうな齒のある鉄や、人の頭へこつそり匂上らうとする爪や、揺れる觸角の上にある爛れた目などを持つた妖怪のやうな貝類のごちやになつて重り合つてゐる中を突進んで、幾つかの洞窟のどん詰りの所まで來ました。王は凸凹した岩につかまつて洞窟の壁を匂ひ登りました、甲殻を冠つた妖怪が王と一緒に匂ひ上りましたが、王は少しも怖れず、とう／＼洞窟の天井に突出てゐる一つの石を見附けました。王が魔術の指輪をその石に觸れますと、石は怖ろしい響を立て、爆發し、忽ち明るい日光がさつと洞窟の中へ流れ込み、暗黒の中で育つた群る怪物どもは驚いて逃げ迷ひました。

ロック王が日光の射込む入口に頭を差入れて見ますと、そこはかの硝子の牢屋で、プランシユランドのジョーチが蜜蜂姫や地上の事を考て歎き悲んでゐるのでした。ロック王は水魔の虜となつてゐるジョーチを救出した

いばつかりにこゝまでやつて来たのでした。

しかし、ジョーヂは顔を曇めた、髯のある、髪をもちやくにしたこの大頭が、岩の下から自分を見守つてゐるのを見ると、危険が身に迫つてゐるのだと早合點して、かの緑色の眼をした女の胸にぶツつけて剣を壊した事を忘れて、手探りで剣を探しました。一方、ロック王は珍らしげにジョーヂをちろく／＼眺めてゐました。

『や。』と王は獨言を云ひました、『ほんの子供だな！』

全く、ジョーヂは何にも知らない子供でした、それだからこそ、水魔の女王の甘い接吻から逃げ出したのでした。アリストートル（希臘の大）が有りつたけの智慧を搾つたつてそんな立派な事は出来ないのです。

『何用だ。大頭奴。』とジョーヂが身に武器を帯びてゐないのに氣が附いて叫びました、『おれはお前に何も害を加へた事がないのに、お前はおれに害を加へるのか？』

『坊ちん。』と一寸法師のロック王が快活なハキ／＼した聲で答へました『お前さんは私に害を加へたかどうか知らないんだよ、お前さんは物の因果關係や、反省や、いろ／＼の哲學の事を知らないんだからね。だが今そんな話はすまい。お前さんがこの隧道にゐたくないのなら、私の後に隨つてお出で。』

ジョーヂは忽ち洞窟へ匍ひ込んで、その壁を迂り降りました、底へ達すると、ジョーヂはその教主に云ひました――

『お前さんは親切な一寸法師だ、私は永久にお前さんを愛する、お前さんはクラリードの蜜蜂姫が何處にゐるか知らないかね？』

『私は澤山の事を知つてゐる。』と一寸法師が答へました、『しかし、私は物を尋ねる人間は嫌ひぢや。』

この言葉を聞くと、ジョーヂはまごついて黙りました、そして章魚や貝殻の怪物がよろ／＼してゐる闇の中を隨つて行きました。ロック王は嘲

笑するやうに云ひました――

『王子さん、これは馬車の通る道ぢやないせ。』

ジョーヂが答へました。

『自由へ行く道はいつでも美しい、私は恩人に随いて行くのだもの、脇道へ連れて行かれたつて何ともないよ。』

一寸法師のロック王は唇を噛みました。斑石の隧道へ達すると王はジョーヂに一寸法師が岩を切開いて作つた階段を指して見せました、二人はそれを登つて地上に出ました。

『この道をお行きなさい。』と王は云ひました、『左様なら。』

『左様ならなんて云ひなさるな。』とジョーヂが答へました、『又お目にかかりませうと云つて下さい。あなたは私の生命を救つて下さつたのだから、私の生命はあなたのものです。』

『それはあなたのためにしたのぢやなくて、他の人のためにしたのだ。』

吾々はもう會はない方がいゝだらう、二人は友達にはなれないんだからね。』

『私は自由の身になつてこんな辛い思ひをしやうとは夢にも思はなかつた。』とジョーヂが眞率で答へました、『しかし、已むを得ない、では左様なら。』

『御機嫌よう。』とロック王が荒々しい聲で叫びました。

一寸法師の作つたこの階段は、思ひ掛けなくも、クラリード城から一哩足らずの所にある石山の附近だつたのでした。

『あの少年は、』とロック王が道を歩きながら呟きました、『智慧も持つてゐなければ一寸法師のやうな富も持つてゐない。何故蜜蜂姫が彼を愛してゐるか分らないが、多分彼が若くて、きれいで、忠實で、大膽だからだらう。』

町へ歸ると、ロック王は他人に善を施した人のやうに獨り北叟笑んでゐ

ました、彼は蜜蜂姫の小舎の傍を通りかゝると、恰度水晶の隧道へ頭を差入れたやうに、開いた窓へ大頭を差入れました、と、蜜蜂姫は銀の花で薄紗に刺繡をしてゐました。

「蜜蜂姫、これからあなたは愉快に暮らせますよ。」とロック王が叫びました。

「あなたもさうですわ、ロック王さん、あなたには望みも悔いもないやうですからね。」

ロック王は望みはうんと持つてゐますが、全く悔いる事は何事もありませんでした。その晩ロック王が御飯を澤山喰べたのはそれがためでせう。王は菌で味を附けた七面鳥を澤山喰べてから、ポップを呼びました。

「ポップ。」と王は云ひました、「鳥に乗つて、小人國の王女の所へ行つて長い間水魔の虜になつてゐたブランシユランドのジョーヂが今日無事にクラリードへ歸つたと知らせて来てくれ。」

王がかう云うと、ポップは鳥に乗つて、飛び出しました。

十九

ジョーヂが自分の生れた地上に歸つて、初めて出遭つたのは洋服屋の親方ジャンで、彼は城の執事の赤い洋服を一揃腕にかけて持つてゐました。ジャンは若主人の顔を見ると吃驚して叫びました。

「やア！あなた様は七年前に湖で溺死なすつたブランシユランドのジョーヂ様ではございませんか、それとも、ジョーヂ様の幽霊か悪魔か。」

「ジャン、わしは幽霊でもなければ悪魔でもない、わしはよくお前の店へ入り込んで、妹蜜蜂姫の人形の着物を作るために洋服の布地をねだつたあのブランシユランドのジョーヂだ。」

「では、あなた様は溺死をなすつたのではないんですね。」とジャンは叫びました。「こんな嬉しい事はない！それに立派におなりなすつたこと！」

あの日曜日朝、あなた様が奥方様と馬を並べてお通りになるのを私の腕に抱かれて眺めました小つちやなピーターも、良い職人になりました立派な野郎になりました。全くですよ、あゝ、有難い事だ。いつもお噂してゐるやうにあなた様が湖の底にお沈みになり、魚の餌食になつておしまひになつたのでないといふ事を聞いたら、野郎も喜ぶ事でございます。その事に就いちや、野郎は始終面白い事を申しましたよ、全く面白い奴でございますからな。それに、クラリッドではみんながあなた様の事を悲んで居ります。あなた様はあんな立派なお子様でした。いつかあなた様が縫針をくれとおっしゃつたので、危いと思つて上げられませんかと申しますと、あなた様は森へ行つて青い松葉の針を拾つて來るとおっしゃつた事を私は死ぬまで忘れません。あなた様はさうおっしゃいました、今でもそれを思ひ出してよく笑ひます。全く、あなた様はさうおっしゃいました。手前どものピーターもあれでなか／＼伶俐な事を申しま

す。あれは桶屋になりましたね、どうか御用を仰せ附けて頂きたうございます。います。」

「彼より他の者は雇はないよ。だが、ジャン、蜜蜂姫と奥方は變りはな
いかね。」

「あ、あなた様は何處からお歸りになつたのでございますか、七年前に
王女蜜蜂姫様が山の一寸法師にお盗まれになつた事を御存じないので
か。お姫様はあなた様のお溺れになつたあの日にお姿が見えなくなつた
のでございます。全く、あの日にクラリッドの最も美しい花が失くな
つたとも申すべきでございます。奥方様は大變お歎きでございます。私
がよくこの世の偉いお方も極く卑しい職人も人情は同じだと申すのはそ
こを申すのでございます。猫でも王様になれば立派だ、といふ格言があ
るではございませんか。奥方様はお可哀相にお髪は白くなり、沈み込ん
でゐらせられます。春になると、奥方様は黒い服を召して鳥が歌をうた

つてゐる垣根の傍を歩いてお出でになります、小さい鳥の身分の方がク
ラリードの女王様の御身分より人に羨ましがられるのです。しかし、奥方
様にもせめてのお慰めがあります。奥方様はあなた様の噂は少しもお聞
きになりませんが、蜜蜂姫様の方は、まだ生きてお出でになるといふ夢
を御覽になりました。』

ジャンはそんな事をくだくと喋り立てましたが、ジョーヂは蜜蜂姫が
一寸法師の虜になつてゐるといふ事を聞くと、もうジャンの言葉が聞え
ませんでした。

『一寸法師が蜜蜂姫を下界に閉籠めてゐる。』とジョーヂは考へました、
『一寸法師がおれを水晶の牢屋から救出してくれた、一寸法師にはいろ
いろの人種があるから、おれを救つてくれた一寸法師は蜜蜂姫を渡つた
一寸法師とは同じ種族ではあるまい。』

ジョーヂは蜜蜂姫を救ふ事より他には何も考へませんでした。

やがて、ジョーヂとジャンは町を通りましたが、人民は家の戸口に立つ
てあの見馴れぬ若者は誰だらうと囁き合ひました、そして若者が非常に
きれいだと異口同音に褒めそやしました。人民の中の物識は、ブランシュ
ランドの若殿様である事を知り、若者は若殿様の幽霊だと決め込んで十
字を切りながら逃出しました。

『聖水をぶっ掛けなくちやいけない。』と梅干婆さんが云ひました、『嫌な
硫黄の臭を残して消えてしまふよ。あの幽霊はジャンの親方を連れて行
くのだ、ジャンの親方は生きながら地獄の火の中へぶち込まれてしまふ
だらう。』

『静かにしろ！婆さん。』と一人の人民は云ひました、『若殿様は生きてお
出でになるんだ、お前やおれよりもつと立派に生きてお出でになるん
だ。若殿様は薔薇の花のやうに生々してお出でになる。若殿様は、下界
どころか、何處か崇厳な宮廷からお歸りになつたやうに見受けられる。』

遠くからお歸りになつたのだよ、婆さん。見ろ侍士のフランクフルも夏の真盛りに羅馬から歸つて来たではないか。」

兜造人の乙女マーガレットは非常にジョージを褒めてゐましたが、やがて神様の像の前に跪いて、かう祈りました、「神様、あの若殿様のやうなきれいな夫を私に與へて下さい。」

こんな風に途々人民はジョージの噂をしました、と、この報知は口から口へと傳へられて、とう／＼果樹園を散歩してゐた公爵の奥方の耳へ入りました。奥方の心臓は激しく鼓動しました、奥方は垣根に棲つてゐる鳥がかううたふのを聞きました——

キ、キ、キ、

ウイ、ウイ、ウイ、

ブランシュランドのジョージ、

キ、キ、キ、

お前が育てた子供のジョージ、

キ、キ、キ、

歸つた、歸つた、歸つた！

ウイ、ウイ、ウイ、

フランクフルが恭しく奥方に近づいて、かう云ひました——

「奥方様、亡くなつたとお思ひになつてゐるブランシュランドのジョージ様がお歸りになりました。私はこの事を歌に作ります。」

一方では、鳥がうたつてゐます。

キユキ、キ、イ、キ、キ、キ、

ウイ、ウイ、ウイ、ウイ、ウイ、

歸つた、歸つた、歸つた、歸つた、歸つた、

奥方は自分の息子にして育てたジョージを見ると、兩手を擴げたまふ、正氣を失つて彼の足下へ倒れました。

クラリードの人はみんな蜜蜂姫が一寸法師に浚はれたのだと信じ込んでおりました。奥方も、夢にははつきり現はれないが、さう信じておりました。

「蜜蜂姫を探し出さう。」とジョーチが云ひました。

「探し出させよう。」とフランクルが答へました。

「きつと彼女をお母様の所へ連れて歸る。」とジョーチが云ひました。

「きつとお連れさせよう。」とフランクルが答へました。

「きつと彼女と結婚する。」とジョーチが云ひました。

「きつと御結婚なさいますやうに。」とフランクルが答へました。

そこで、二人は一寸法師の習慣や蜜蜂姫がなくなつた當時の有様を人民に尋ねました。

或る日、二人は昔クラリード公爵の奥方の乳母だつたモーリールにその事を探ねました、モーリールは今ではもう赤坊に吞ます乳が出ないで、その代りに庭で雛を飼つておりました。主従二人がモーリールに食つたのはその庭でゝした。モーリールは雛に穀粒を投げてやりながら、

「ブシッ！ ブシッ！ ブシッ！ ブシッ！ リル リル リル リル ブシッ、ブシッ、ブシッ、ブシッ！」と叫んでおりました。

「ブシッ、ブシッ、ブシッ、ブシッ！ これはまあ若殿様でございましたか。

ブシッ、ブシッ、ブシッ！ まあ、こんなに丈がお高なおなり遊ばして——ブ

シッ！ そしてこんなにおきれいに。ブシッ、ブシッ！ シュー！ シュー！

シュー！ シュー！ あの肥つた奴が小っちゃな奴の餌を喰べてゐるのを

御覽遊ばせ！ シュー、シュー！ シュー！ 世の中の事はみんなこんな

ものでございます。金持は金が溜るばかりだし、貧乏人はますます貧乏

になつて行きます、肥つた者はだん／＼肥つて行きます。この世には公

平といふものはないのでございますよ！　あなた様に何をお歎待いたしませうかね。麥酒を一杯づつ差上げませうか。」

「それは有難いね、モーリール、お前は私がこの世で一番愛してゐるお母様を乳で育ててくれたのだから、私はお前に禮を云はなくちやならぬい。」

「その通りでございますよ、若殿様、お母様は六箇月と十四日で初めて歯が出ましたよ。その時は亡くなつた奥方様が私に御褒美を下さいました。本當でございますよ。」

「モーリール、蜜蜂姫を浚つて行つた一寸法師の事でお前の知つてゐるだけ話してはくれないか。」

「あゝ、若殿様、私は蜜蜂姫様を浚つて行つた一寸法師の事は何にも知りません。私のやうな婆さんが何を知つてゐるもんですか。知つてゐた少しばかりの事も、何年か前にみんな忘れてしまひました、物覚えがわるくなつて眼鏡を置いた所さへ忘れてしまひます。時とすると、鼻の上にあるのに、眼鏡を探し廻ります。この麥酒を召上つて下さい、これは造りたてでございます。」

「お前の健康を祝する、モーリール、だが、人の噂によると、お前の所のお爺さんは蜜蜂姫がゐなくなつた事に就て何か知つてゐるといふ事はないか。」

「全くでございますよ、若殿様。爺さんは學問は少しも教はりませんでしたが、酒屋や料理屋でいろいろの事を覚えて來ました。何でも一度聞いたら忘れないんです。今生きてゐましたら、この卓子に坐つて明日まであなた様にいろいろのお話をいたしますでせう。爺さんは私にあんまり澤山のお話をしましたので、頭の中で何もかもごちやになつてゐますから、今では何にもお話が出來ません。全くでございますよ、若殿様。」

事實、この年若つた乳母の頭は龜裂の入つたスーブ鍋のやうでした。

ジョーヂとフランクルがその頭から何かを聞出さうとするのは實に困難でした。が、とうとう何遍も何遍も同じ事を繰返して、次ぎのやうな話を引出しました、――

「今から七年前、あなた様と蜜蜂姫様が遊びにお出でになつてとうとう二人ともお歸りにならなかつたあの日でございます。亡くなつた爺さんが馬を賣りに山へ登りました。全くでございますよ、爺さんは馬の脚を丈夫にし、眼を立派にするために、サイダーに浸けた燕麥をうんと與つて居りました、爺さんは馬を山の傍の市場へ連れて参りましたのです。爺さんは燕麥やサイダーを與つた事を後悔しませんでした、馬がすつと良い價に賣れたものですからね。獸も人間と同じやうに容姿を彼此云はれるのです。亡くなつた爺さんは商賣がうまく行つたので、友達にお酒をおごりましてね、手にお盃を持つて友達の健康を祝しました。

「若殿様、このクラリード中を探したつて、お盃を手持つて友達の健

康を祝する時の爺さんと比べものになる男は一人も居りませんよ。そんな事をして、その日は、友達に何遍もお酒をおごつて、爺さんは夕方獨りで家へ歸りましたが、途中で道に迷ひました。爺さんはとある洞窟の傍へ出ました、すると、そこで大勢の小男が女の兒か男の兒を擔架に載せて連れて行くのをはつきり見ました。爺さんは縁起が悪いので怖くなつて駆出しました、お酒に酔つてゐても用心を忘れなかつたのでございますよ。所が、洞窟から少し隔つた所で、爺さんは煙管を落したのでそれを拾はうとしましたが、煙管の代りに小さな縞子の靴を拾ひました。上機嫌の時は、爺さんはよく「煙管が靴に變つたのはあれが初めてだ。」と云つて笑ひましたよ。それは小さな女の兒の靴だったので、爺さんは森の中でこの靴を落した女の兒が一寸法師に浚はれて行つたに違ひないと思ひました。爺さんが靴をポケットに入れやうとすると、頭巾を冠つた小男が大勢で爺さんを捉へて、ひどく打ちのめしましたので、爺さんは

その場に倒れて氣絶してしまひました。」

「モーリール！ モーリール！」とジョーヂが叫びました、「それは蜜蜂姫の靴だその靴を私におくれ、私はそれに千遍接吻をしよう。私はそれを永久に胸に抱いて、死ぬ時は私と一緒にそれを埋めて貰はう。」

「御意のまゝになさいませ、ですが、若殿様、あなた様は何處からそれを見附けてお出でになりますね？ 一寸法師が爺さんの手からそれを引奪つて行つてしまつたんですからね、爺さんは打たれ損だつたと始終考へてゐました、爺さんは靴をポケットに入れて持つて歸つて、お役人様に見せるつもりだつたのです。上機嫌の時、爺さんはよく申しましたつけ——」

「澤山だ——もう澤山だ！ その洞窟の名前だけ教へてくれ！」

「一寸法師の洞窟と云つて居ります、若殿様、うまく附けたものですよ。亡くなつた爺さんは——」

「もう喋るな、モーリール！ フランクール、お前はその洞窟が何處にあるか知つてゐるか？」

「若殿様。」とフランクールが麥酒を飲み乾して云ひました、「私の歌をもつとよく御存知でしたら、その洞窟を御存知の筈でございます。私はその洞窟を歩くと十二の歌に詠みました、私は一片の苔をも忘れずにその洞窟の事を詠み込みました。若殿様、その十二の歌を一つ聞上げて見ませう、そのうち六つはたしかに傑作でございます。しかし、他の六つも満更棄てたものではございません。一つ二つうたつて見ませう……」

「フランクール。」とジョーヂが叫びました、「吾々はその一寸法師の洞窟を占領して、蜜蜂姫を救はう。」

「無論、さう致しませう。」とフランクールが答へました。

その晩、みんなが寝てゐる間に、ジョーヂとフランクールは武器を探しに地下室へ忍び込みました。槍、劍、七首、闊劍、獵ナイフ、短刀などが煤けた垂木の下にキラ／＼光つてゐました。梁の下には鎧が一着づつ、昔それを着て冒険に行つた勇者の精神が籠つてゐるとでもいふやうに傲然と控へてゐました。籠手は十本の鐵の指で槍を握り、勇氣には用心が必要だといふ事を示さうとするかのやうに、優れた戦士は防禦するにも攻撃の時のやうによく武装する事を示さうとするかのやうに、楯は脛當の上に立てかけてありました。

ジョーヂは、これ等の鎧の中から、蜜蜂姫のお父さんがアヴァロン島やチュール島までも着て行つた鎧を選びました。ジョーヂはフランクールに手傳つて貰つてその鎧を着、タラリトドの金色の太陽を紋章に描いた楯を持つて行く事を忘れませんでした。フランクールは祖父さんの鎧甲を着、古い兜を冠り、その兜に蟲の蝕つたぼろ／＼の羽を着けました。

それは彼が愉快な風を見せるためにした事です、彼の考によれば快活といふものは如何なる場合でもいふものであるが、殊に危険に身を晒さうといふ場合にはいふものだといふのですが、それは至極道理です。

二人はかういふ風に武装して、月の光を浴びながら、野へ出ました。フランクールは前以て馬を二頭裏門の傍の森の端づれに繋いで置いたので、そこへ行つて見ると、馬は草を喰べてゐました。二頭の馬は足の早い駿馬で、妖怪や幽霊のうろ／＼してゐる中を走つて、一時間も経たぬうちに一寸法師の山へ着きました。

「これが洞窟でございます。」とフランクールが云ひました。

主従は馬を降り、手に劍を持つて、洞窟の中へ入つて行きました。かういふ冒険を企てるには非常な勇氣が要るのですが、ジョーヂは愛に燃えてゐましたし、フランクールは忠義な臣でしたから、それを企てる事が出来たのです。

主従が一時間ばかり暗黒の中を進むと、明るい光が見え出したので、驚きました。それは讀者諸君が既に御存じの、小人國を照らす星の一つでした。この下界の星の光によつて、二人は自分たちが古い城の下に立つてゐるのを見出ししました。

「この城を占領しなくちやならぬ。」とジョーヂが云ひました。

「全くでございます。」とフランクフルが云ひました。「しかし、先づこの葡萄酒を少し飲まさして頂きたう存じます、私はこれを用心に持つて参りました、酒が良ければ人間が良い、人間が良ければ槍が良い、槍が良ければ敵も怖るゝに足らぬのでござりますからな。」

ジョーヂは四邊に誰もゐないので、劍の柄で裂しく城の戸を叩きました、すると、窓の一つへ長い髯の生えた一寸法師の老人が現はれてかう尋ねました。

「お前さんは誰だ？」

「フランクフルランドのジョーヂだ。」

「何用あつて来た？」

「お前たちが不屈きにもお前たちの土龍の穴へ閉籠めたクラリードの蜜蜂姫を救ひに来たのだ、お前たちは憎むべき小さな土龍だ！」

一寸法師はゐなくなつて、又ジョーヂとフランクフル二人切りになりました、フランクフルは主人にかう云ひました――

「若殿様、あなた様は今一寸法師にお答へになる時辯舌の力を大分お使ひ減らしになつたやうにお見受けしますが如何ですか。」

フランクフルは何物をも怖れはしませんでした、が、彼はもう老人で、その心は彼の頭のやうに年のために磨かれてゐましたので、フランクフルは人に腹を立てさせるのを好みませんでした。しかし、ジョーヂは聲を限りに怒鳴り散らしました。

「卑しい土の中の人間、土龍、獾、山鼠、獾鼠、河鼠、戸を開けろ、

貴様たちの耳を斬つてしまふぞ。』

所が、ジョーヂがかう云ふや否や、城の青銅の扉がひとりでに徐かに開きました、その大きな扉を押してゐる者は見えないのです。

ジョーヂは恐怖を感じましたが、その不思議な門の中へ飛び込みました、その勇氣が恐怖よりも強かつたからです。庭まで入つて見ると、窓にも、廊下にも、屋根にも、破風にも、天窓にも、煙突の尖にまでも、弓と十字矢を持つた一寸法師ともがびり群れ集つてゐるのでした。

ジョーヂは青銅の扉が後の方で閉る音を聞きましたと、矢が雨のやうに飛んで来て、頭や肩をかすめました、ジョーヂは再び非常に恐怖を感じましたが、再びそれに打克ちました。

ジョーヂは手に劍を持ち腕に楯をかけて、階段を登つて行きました、すると、不圖一番高い所に、黄金の笏を持ち、王冠を頂き、紫のマントを纏つた立派な一寸法師が嚴かに立つてゐました。よく見ると、それは

水晶の牢屋から彼を救ひ出したかの一寸法師でした。

そこで、ジョーヂは一寸法師の足下に身體を投倒して、泣きながら叫びました。

「あゝ、恩人、あなたは何人ですか。あなたは私の愛する蜜蜂姫を盗んだ一寸法師の仲間ですか。』

「私はロック王だ。』と一寸法師が答へました、『私は蜜蜂姫に小人國の智識を授けるために彼女を私の傍へ置いた。お前さんは花園へ落ちる雹の暴風雨のやうに私の國へ落ちて来た。が、人間よりも強い一寸法師は、人間のやうに怒りはしない。私は慧智を持つてゐるためにお前さんよりもすつと高い所にあるから、お前さんが何をしやうと怒りはしない。私をお前さんよりも優れた者にしてゐるすべての特質の中で、私が一番熱心に保護してゐるものは正義だ。今蜜蜂姫をこゝへ連れて来て、彼女がお前さんに随いて行くかどうか訊いて見やう。私がこんな事をするのは、

お前さんがさうしたいと思つてゐるからするのではない、私がしなくてはならぬと考へるからするのだ。」

四邊が水を打つたやうに静かになりました、と、蜜蜂姫が白衣を纏ひ、金髪を靡かして現はれました。ジョーヂを見るや否や、蜜蜂姫は駆け寄つて、ジョーヂの腕の中に身を投げかけ、あらん限りの力で彼の鐵のやうな胸にかちり附きました。

すると、ロック王が蜜蜂姫に云ひました。――

「蜜蜂姫、あなたが結婚したいといふのはこの男ですか？」

「え、この人です、ロック王さん。」と蜜蜂姫が答へました。「皆さん、私がかどんなに笑ふか、どんなに仕合せだか御覽なさい。」

かう云つて、蜜蜂姫は泣き出しました。彼女の涙はジョーヂの顔の上へ落ちました、が、それは嬉し涙でした、それと同時に、大勢の小さい笑聲と、小さな子供が口をびちやく云はせる音のやうな譯の分らぬ大

勢の言葉が聞えました。蜜蜂姫は自分の悦んでゐるのを見てロック王が悲むだらうといふ事をすつかり忘れてゐました。

「再びお前を見附け出す事が出来てこんなに嬉しい事はない、この世の中で最も美しく最も懐かしき者よ。お前は私を愛してゐる！ 有難い、お前は私を愛してゐる！ だが、蜜蜂姫、お前は水魔が私を閉籠めた水晶の牢屋から私を救出してくれたロック王を愛さないのか？」

蜜蜂姫はロック王の方を向き直りました。

「ロック王さん、あなたはそんな事をなさつたのですか？」と彼女は叫びました。「あなたは私を愛してゐました、それなのに、私が愛してゐる人を、私を愛してゐる人を救ふとは――」

蜜蜂姫はそれ以上口を利く事が出来なくなつて、跪いて、両手で頭を掴み直しました。

この有様を見てゐた一寸法師どもは、その十字矢を涙に濡らしました。

そして蜜蜂姫は王の寛大と親切に驚き、王に對して娘の父親に對する愛を感じました。

蜜蜂姫はジョーヂの手を取りました。

「ジョーヂさん。」と彼女は云ひました、「私はあなたを愛します、どんなにあなたを愛してゐるか神様が御存知です。ですが、どうして私はロック王さんを置去りに出来ませう？」

「おい、こら！」ロック王は怖ろしい聲で叫びました、「もうお前たちはわしの虜だぞ！」

が、王のこの怖ろしい聲は戯談に使つたのでした、王は實際は少しも怒つてはゐないのでした。その時フランクールは王に近づいてその前に跪きました。

「陛下。」と彼は叫びました、「陛下は私をも主人と同じやうに虜になさるのでせうか？」

蜜蜂姫はフランクールを見附けて、かう云ひました——

「お前だつたか、フランクール。お前に會へて私は嬉しいよ。お前は何かといふ怖ろしい帽子を冠つてゐるの？ お前近頃新しい歌を作りましたか？」

そこで、ロック王は三人を宴會に招きました。

二十二

翌朝、蜜蜂姫、ジョーヂ、フランクールの三人は、一寸法師ともが用意してくれた立派な着物を着て、宴會の開かれる大廣間へ行きました。約束通りにロック王は皇帝の服装で直ぐに三人の所へやつて來ました。王の後からは、武器を持ち、毛皮を身に纏ひ、兜に白鳥の羽を刺した臣下が續きました。一寸法師の群集が、窓や、風孔や、煙突から入つて來て、腰掛の下へ轉げ込みました。

ロック王は石の卓子の上に乗りましたが、卓子の端には、細口罎、枝附燭臺、大洋盃、その他素晴らしい細工を施した黄金の盃などが載つてゐます。王は蜜蜂姫とジョージに近づくとやう合圖をしました。

「蜜蜂姫。」と王は云ひました。「吾國へ来た外國人は七年後に釋放する事に小人國の法律で定められてゐるのだ。あなたは七年間吾々の所にゐたから、この上留め置くと、私は不忠な人民にならなければならぬ、非難すべき國王にならなければならぬ。しかし、あなたを歸へす前に、私は、自分があなたと結婚が出来なかつたから、あなたが選んだ人と結婚の約束をさせたいと思ふ。私は自分の身よりもあなたを愛してゐるから、喜んでこの事をする、私の苦みは——若しさういふものがまだ残つてゐるとすれば——あなたの幸福の前では小さな雲のやうに消えてしまふのだ。クラリードの蜜蜂姫、小人國の王女、手をお出さない、ブランシユランドのジョージ、手をお出さない。」

ロック王はジョージの手を蜜蜂姫の手の上に置き、人民の方を振向いて、響き渡る聲でかう云ひました。——

「私の子なる臣民、諸君はこの二人が地上で結婚するといふ約束の證人だ。二人はこれから一緒に歸り、互ひに勇敢であり、謙遜であり、信實であるやうに助け合ひ、薔薇や、石竹や、芍薬が良き園丁のために花咲くやうに花咲くがよい。」

この言葉を聞くと、一寸法師どもはドッと大きな叫聲を挙げましたが、悲んでいゝか喜んでいゝかが分らないので、彼等は當惑して非常に苦みしました。

ロック王は再び二人の方を向き、細口罎や、大洋盃や、その他美しい細工を施した什器を指さして、かう云ひました——

「これが一寸法師の贈物です。これを收めて下さい。あなたはこれ等の什器を見る毎に大勢の小さな友達を思ひ出すでせう。これは彼等の贈物

です、私の贈物ではない。私が何をあなたに贈らうとしてゐるかは今に分るでせう。」

長い間沈黙が續きました。

ロック王は優しく祟い顔をして、蜜蜂姫を眺めました、薔薇をかざした蜜蜂姫の美しい輝やく頭は彼女の愛人の肩に倚れかゝつてゐました。

やがて、王は言葉を續けました。

「私の子供たちよ、情熱的に愛するのは完全な愛ではない、お前たちは能く愛さなければならぬ。情熱的な愛は無論良いものであるが、美しい愛は尙ほそれよりも良い。お前たちは優しさと同時に力を持つが、力は何物にも缺けてゐない、忍耐をさへ持つてゐる、そして力の中に僅かばかり憐愍の情を交へるが、お前たちは若くて、美しく、且つ善良である、が、お前たちは人間だ、それがために多くの苦みを嘗めなければならぬ。若し苦みを受けた時、憐愍の情がお前たちの感情の中に

入らなければ、お前たちの苦みは何の役にも立たぬのだ、この憐愍の情は生涯の如何なる場合にも役に立つものではない、それは雨風を防ぐ事の出来ぬお祭の着物のやうなものだ。耐へ、宥し、慰めよ、愛の學問はこの三つに盡さるのだ。」

ロック王は優しく且つ強い感情に胸が迫つて、言葉を切りました。

「私の子供たちよ。」と王はやがて言葉を續けました。「幸福に暮らすやうに、お前たちの幸福をよく護るやうに、よく護るやうに。」

ロック王が話をしてゐる間に、ビック、タッド、ディック、ポップ、ツルツグ、ポーの六人の一寸法師は蜜蜂姫の白い着物にかちり付き、彼女の手や腕に接吻して、別れを惜みました。すると、ロック王は帯の間から輝く寶石を鑲めた指輪を出しました。それは水魔の牢屋を破つたかの魔法の指輪でした。ロック王はそれを蜜蜂姫の指にはめました。

「蜜蜂姫。」と王は云ひました、「私の手からこの指輪を受けて下さい、こ

の指輪を持つてゐれば、あなたとあなたの夫は、いつでもこの小人國へ入れるのです。吾々は喜んであなた方を迎へ、必要ある時にはあなた方を助けます。あなた方が地上へ歸つたら、無邪氣で勤勉な、地の下に住んでゐる一寸法師を輕蔑するなと子供たちに教へて下さい。

學 校

ゼンサイニユといふ女の先生の學校は世界中で一ばん良い小學校です。あの學校を悪い學校だと云ふ人は、悪口を云ふ人だと私は思ひます。ゼンサイニユ先生の生徒はみんなお行儀がよくて、よく勉強をします。小さな生徒たちが温順しく坐つて、規律正しく並んでゐる所を見ると、まことに好い氣持がします。生徒たちは多くの小さな繯で、ゼンサイニユ先生がその繯に一生懸命で智慧を注ぎ込んでゐるとでもいふやうです。

ゼンサイニユ先生は高い机に對つて、姿勢正しく坐つてゐらつしやいます。先生のお顔は優しく、眞面目です。先生のきれいに編んだ髪や黒い肩掛を見てゐると、お行儀がよくなり、思ひ遣りが深くなります。

非常に伶俐なゼンサイニ先生は、今生徒に算術を教へて居られます。先生は生徒のローズ・ベノアといふ女の兒にかうお尋さになりました。

「ローズさん、十二から四を引いたら、幾つ残りますか。」

「四でせう？」とローズ・ベノアが答へました。

ゼンサイニ先生は間違つてゐるとお思ひになりました。

「では、エムリーヌ・キャベルさん、十二から四を引くと、幾つ残りますか。」

「八です。」とエムリーヌ・キャベルといふ女の兒が答へました。

「ローズさん、八ですよ。」とゼンサイニ先生が云はれました。

ローズ・ベノアはぼんやりして考へ込みました。ゼンサイニ先生は八残ると云はれたが、若しそれが帽子を八つとか、ハンケチを八枚とか、林檎を八つとか、羽を八本といふのだつたら、ローズには分らなくなるのです。ローズは長い間いろ／＼と疑つてゐました。ローズは算術が少

しも出来ないのです。

けれども、ローズは聖書の歴史は非常によく出来るのです。ゼンサイニ先生の組には「エデンの花園」や「ノアの方舟」の事をローズほどよく知つてゐる生徒は他にはありませんでした。ローズはエデンの花園にあるどんな花でも、方舟の中にもたどんな獣でも知つてゐます。ローズは澤山のお伽噺をゼンサイニ先生と同じに知つてゐます。ローズは狐と鳥のお話や、猿と小犬のお話や、雄鶏と雌鶏のお話をみんなよく知つてゐて、さういふ動物がどんな話をしたかをよく覚えてゐます。ローズは動物が昔は口を利いたのだといふ事を聞いても少しも驚きはしませんでした。誰か、動物は今ではもう口を利かないのだと云つたら、ローズは不思議に思ふでせう。ローズは、自分の家のトムといふ大きな犬やチープといふ小さな金絲雀の云ふ事がよく解ると思つてゐるのです。ローズの考は本當です。動物は昔から口を利いてゐるのです。今でも口を利

くのです、たゞ動物はお互同志で話をするだけです。ローズは動物を可愛がつてゐます、動物の方でもローズを愛してゐます、だから、ローズには動物の云ふ事が解るのです。お互ひに氣心が解り合ふためには、お互ひに愛するのが一番いゝのです。

今日は、ローズは少しも間違えずにお答へをしました。ローズは良い點を頂きました。エムリーヌ・キャベルも算術がよく出来たので良い點を頂きました。

學校から歸ると、エムリーヌはお母さんに良い點を貰つて來ましたと云ひました。そしてエムリーヌはお母さんにかう尋ねました。

「お母さん、良い點は何の役に立つの？」

「良い點は何の役にも立たない、だからこそ、みんなは良い點を頂くと自慢をするんだよ。一番尊い御褒美は、一文の徳も行かないが、それで非常に名譽になるやうな御褒美だといふ事が、いつかお前にも解る時が

來るでせう。」とお母さんが答へました。

紫陽花

小さな女の子は花と星を摘りたいと思ふものです——それが女の子の性質です。しかし、星は摘る事が出来ません、星は、この世の中には幾ら欲しいと思つても手の届かない望があるものだといふ事を小さな女の子たちに教へます。マリーといふ女の子が公園へ遊びに行つて、紫陽花の樹に近づきました、その花があんまりきれいなので、マリーは澤山の花を一つに集めやうとしました。それは六ヶ敷い事でした。マリーは両手で花を引張り集めました、枝が折れたのでその機みで彼女は危ふく後へひつくりかへらうとしました。マリーはそれを面白がつて、尙ほも得意でそれをやつてゐました。所が、乳母がマリーを見附けました。

乳母は駆けて来て、マリーの腕を掴んで叱りました、そして罰のために大きな胡桃の樹の根下の、日本製の日傘の蔭に立つてゐなさいと命じました。

マリーはそこに坐つて、困つた事になつたものだと思へてゐました。

マリーは片手に花を持つてゐました、日傘はマリーの周囲に明るい輪を描いてゐました、マリーは恰度どこか外國から来た小さな佛様のやうに見えました。

乳母はマリーにかう云ひました、「お嬢様、その花をお口へ入れちゃいけませんよ。乳母がしちやいけませんといふことをなさると、犬のトト一が来て、お嬢様の耳を喰へてしまひますよ。」かういふ怒ろしい言葉を殘して乳母は行つてしまひました。

マリーは明るい日傘の下にちつと坐つて、身の周囲を見たり、地面を見詰めたり、空を見上げたりしてゐました。マリーは大きな世界を見ま

した、小さな女の子にとつてはこの世界は大きく、美しく、面白いので
す。しかし、マリーの持つてゐる紫陽花の花は他のものをみんな集めた
よりももつと面白いのでした。「これは花だから、きつと好い香がするだ
らう。」とマリーは考へました。マリーの鼻はきれいな紫色の花に觸れて
嗅いで見ましたが、少しも香はないのです。マリーは物の香を嗅ぎ馴れ
ませんでしたが、マリーはほんの先程まで、薔薇の花を見てもその香を嗅
がずに棒で叩いてゐたのです。マリーを笑つちやアいけません、何事でも
もさう一時に學べるものではないのです。そして、若しマリーがお母さ
んと同じやうによく物の香を嗅ぐ事が出来たら、この時何の得もしなか
つたでせう。紫陽花には香がありません、だから、紫陽花はうつくしい
花だけれども、人が左程珍重しないのです。所が、マリーは「この花は
きつとお砂糖で出来てゐるのよ。」と考へました。そこで、マリーは大き
な口を開けて、花を唇へ持つて行かうとしました。

所が、その時、突然、マリーの飼つてゐる小さな犬が駈けて來ました
それはトトといふ犬です、トトはゼラニウムの花の上を轉がるやう
に駈けて、マリーの傍に近づき、兩方の耳を立て、そのきつい小さな
丸い眼でマリーを睨みつけました。

村の子供

ビエール、ジャック、ジャンといふ同じ村の三人の少年が、一列に並んで何物かを見詰めて立つてゐます、脇から見ると、彼等の並んでゐる所は笛の歌口かバンディアン・バイブ（一種の簫）のやうに見えます、たゞバンディアン・バイブは管が七本だが、これは三本です。左方にゐるビエールは丈の高い少年ですが、右方にゐるジャンは丈の低い見です。ジャックは二人の中間で、丈が高いとも云へれば低いとも云へるのです、左側にゐるビエールに比べれば高いし、右側にゐるジャックに比べれば低いのです、皆さんに考へて頂きたいのはこのジャックの場合です、どんな人でもこのジャックと同じで、隣の人の丈の高さに従つて、自分の丈が高くなつたり

低くなつたりするのです。

だから、ジャックは丈が別に高くも別に低くもないと云つたつていゝしジャックは丈が高い、ジャックは丈が低いなど云つてもいゝわけです。この場合では、ジャックはこの生きてゐるバンディアン・バイブの真中の管です。

しかし、ジャックは何をしてゐるのでせう、彼の二人の友達は何をしてゐるのでせう？ 彼等は見詰めてゐます、ちつと熱心に見詰めてゐます、三人とも、何を見詰めてゐるのでせう？ 遠方に消えてしまつた物を見詰めてゐるのです、それはもう眼の屈かぬ所へ行つてしまつたが、それでもまだ彼等にはそれが見えるのです、彼等の眼はその光のために眩んでゐるのです。ジャンはそれがために手に持つてゐる皮の鞭や獨樂を忘れてしまひました。ビエールとジャックは両手を背へ廻してばんやり立つてゐるのです。

三人は何をそんなに驚いて眺めてゐるのでせう？それは行商人の車です。三人はその車が村の通りに止まつてゐるのを見たのです。

行商人が油紙を除けると、男も女も子供たちも車に積んだ小刀や、鉄や、紙鐵砲や、水兵人形や、木の兵隊や、鉛の兵隊や、香水の罐や、石鹼や、錦繪や、その他澤山の立派なものを見て眼の正月をしました。島や丘からやつて来た田舎娘は欲しいので顔を眞青にし、ビエールとジャックは面白くて顔を眞赤にしました。ジャンは夢中で舌を出してゐました。車の中のものもみんな三人の少年には立派で珍らしく見えました。所が、三人が中でも欲しかつたのは、どうするのか何に使ふのかちつとも分らない不思議な品物でした。たとへば、鏡のやうに磨いた球がありました。それに向ふと、顔が曲つて可笑しな顔に見えるのです。それから生々しい色で晝を描いたエビナル焼の瀬戸物がありました、中に何が入つてゐるのか誰にも分らない小さな箱が澤山ありました。

女たちはモスリンの布やレースを買ひました、と、商人は黒い油紙を再び車の上へ掛けました。そして商人は車を引いて村の通りを進んで行きました。今車も車を引く人も地平線の彼方に見えなくなつてしまつたのです。

ロージャーの馬

馬を飼ふのは非常に心配なものです。馬は花車な動物で、面倒を見るのがなか／＼大變です。嘘と思ふなら、ロージャーに尋いて御覽なさい！

ロージャーは今一生懸命で彼の立派な栗毛の馬を刷毛で擦つてゐます。戦争で尻尾の毛を半分失くさなかつたら、この馬は木馬の中の王でせう。ロージャーは木馬の尻尾の毛が生えるかどうか知りたいたと思つてゐます。

ロージャーは木馬の毛を擦るまねをしてから、馬に嘘つこの燕麥の飼料をやります。小さな子供たちが乗つて夢の國を駆け廻るこの木で拵へた小さな動物を飼ふには是非かういふ風にしなければならぬのです。

そこで、ロージャーは勇み立つた馬に乗つて、遠乗に出掛けます。この可哀相な馬は耳が無くなり、鬣は古い壊れた櫛のやうなギザ／＼になつてゐますが、ロージャーはこの馬を可愛がつてゐるのです。何故といふにこの馬は或る貧しい人の贈物だからです、貧しい人の贈物は他の人の贈物よりも貴いのです。

ロージャーは出掛けました、彼は遠方まで馬を駆けさしました、敷物の花は熱帯地方の森の花です。ロージャーよ、お前は仕合せ者だ！お前の馬はお前を乗せて世界中を楽しく旅するのだ！だが、お前にとつてはこれほど危険な事はないのだよ！大となく小となく、吾々はみんな自分の馬に乗るのだ！吾々のうち自分の木馬を持ってゐない者があるだらうか？人間の木馬は人の世の道を氣狂のやうに駆けるのです、或る馬は名譽を追つてゐます、或る馬は快樂を追つてゐます、多くの馬は崖から落ちて、乗手の頸を折るのです。ロージャーよ、幸運なれ、私はお前が大人に

なつた時、お前が二頭の馬に乗つて、正しい道を行くことを望む、その一頭は元氣のある馬で、今一頭は優しい馬です、その一頭は勇氣といふ馬で、今一頭は親切といふ馬です。

勇 氣

ルイソンといふ女の兒がフレデリックといふ男の兒と一緒に今村の道を通つて學校へ行きます。太陽は樂しげに輝やき、二人の子供は歌をうたつてゐます。二人は鶯のやうにうたつてゐます、それは二人の心が鶯のそののやうに軽いからです。二人は彼等のお祖母さんたちが小さな娘の頃うたつた歌をうたつてゐます、彼等の孫がいつかうたふだらうところの歌をうたつてゐます。何故といふに、歌は決して枯れない優しい花で、幾時代にも亘つて人の口から口へと傳へられるものだからです。唇は色褪せ、聲はだん／＼と消えて行くが、歌は永久に生きてゐます。人間が男も女もみんな飼羊者であつた時代から今日の吾々に傳へられて

ある歌があります さういふ歌の中には羊と狼の他、何にもうたつて
ないのはそれがためです。

ルイソンとフレデリックは歌をうたつてゐます。その口は花のやうに圓
く、その歌は朝の空気に透るやうにはつきり響いてゐます。所が、突
然、歌がフレデリックの喉の中で詰りました。

フレデリックは何故續けて歌がうたへなかつたのでせう？それは恐怖
のためでした。フレデリックは毎日きつと村端づれで肉屋の犬に會ふの
ですが、その犬を見ると、胸がドキ／＼して足が顫へるのです。けれど
も、肉屋の犬はフレデリックに飛びかゝりませんでした、脅かしませんで
した。いつも店の入口に温順しく坐つてゐるのです。けれども、その犬
は毛が眞黒で、血走つた眼を据ゑ、鋭い白い齒を見せて、怖ろしい容子
をしてゐるのです。それに、犬が肉の片や骨やその他見るから嫌らしいも
の、眞中に坐つてゐるので、フレデリックは尙一層恐ろしく思ふのでし

た。勿論、それは犬の罪ではありません、犬は生れながらにかういふ恐
ろしい姿をしてゐるのです。で、フレデリックは店の前に犬があるのを見
ると、大人が氣の荒い犬を追ふ時にするやうに大きな石を拾ひ上げるの
です、そして向側の壁にく／＼ついてコソ／＼逃げて行くのです。

今もフレデリックがさうして逃げ出すと、ルイソンがそれを見て笑ひま
した。

ルイソンは、向ふ見ずな人が喧嘩をする時に吐くやうな亂暴な言葉を
吐き散らしはしませんでした。ルイソンは一言も口を利かないのです、
歌を止めもしません。が、ルイソンは聲の調子を變へて、フレデリックを
嘲るやうな調子でうたひ始めましたので、フレデリックは耳まで眞赤にな
りました。そして彼の頭の中はいろ／＼の考で一ぱいになりました。フ
レデリックは、人間は危険よりも耻の方を餘計に恐がらなければならぬの
だといふ事を知りました。彼は物を恐がらないやうにしなければならぬ

と思ひました。

そこで、学校の歸りに肉屋の犬に遭つた時、フレデリックは大膽に犬の傍を通りました。

その時、フレデリックはルイソンが自分を見てゐやしないかと横目で断えずルイソンを見てゐたといふ事です、若しこの世の中に女がゐなかつたら、男はそんなに勇氣がないだらうと或る人は云ひましたが、それは本當です。

牧場の花

カテリーヌは、朝御飯を喰べてから、弟のジャンと一緒に牧場へ出掛けました。二人が出掛ける時には、日光はこの子供たちと同じやうに若くて爽やかに見えました。空は眞青ではなく、やゝ灰色を帯びてゐました、青よりは灰色の方が優しく見えるものです。カテリーヌの眼も、朝の空を、少し取つて作つたとしてもいふやうに、同じ灰色をしてゐました。

カテリーヌとジャンは畑の中をぶら／＼歩きました。二人のお母さんは百姓の女房で、家で仕事をしてゐました。二人には附添の女中がありませんでしたが、彼等にはそんなものは要らないのです。二人は道をよ

く知つてゐました、森でも畑でも丘でもみんなよく知つてゐました。カタリーヌは太陽を見ると時間が分るのでした、カタリーヌは町に生れた子供の知らないやうないろくの自然の秘密を知つてゐます。小さなジャンも、森や、池や、山などに就いていろくの事を知つてゐます、それは彼が田舎の子供だからです。

カタリーヌとジャンは花の咲いた牧場を歩き廻りました。カタリーヌは歩きながら花束を作りました。カタリーヌは青い矢車菊や、赤い罌粟や、碎米薺や、子供たちが「雛」と呼んでゐる金鳳花を摘みました。カタリーヌは「ヴィーナスの鏡」と人の呼んでゐる籬に咲く紫色のきれいな花を摘みました。彼女は遠志の黒い穂や、稚牛兒苗や、谷間の百合を摘みました、谷間の百合の小さな白い花は、一寸微風が吹いても好い香を漂はします。カタリーヌは、花が美しいから好きです、それにこんなきれいな装飾になるから好きです。彼女は極く詰らない著物を著てゐま

す、彼女の美しい髪は鳶色のリンネルの帽子の下に隠されてゐます。カタリーヌは質素な著物の上に碁盤縞の前掛を掛けて、木靴を穿いてゐます。彼女はお祭の時しか立派な著物を見た事はないのです。しかし、この女の兒でも生れながらにして知つてゐる或る事柄があります。カタリーヌは花を著物に著けると、美しくなる事を知つてゐます、きれいな貴婦人が胸に花束を附けると、附けない前よりも美しくなる事を知つてゐます。で、今彼女は自分の頭よりも大きい花束を持つてゐるから、非常に美しいに違ひないと考へました。彼女の考はその花のやうに立派で香しいのです。それは口では云ひ現はせないやうな考でした、その考を口で云ひ現はす事の出来るやうな美しい言葉はないのです。それは歌でなければ云ひ現はせません、愉快な、優しい、非常に美しい歌でなければ云ひ現はせないのです。そこで、カタリーヌは花を摘みながら、「ただひとり森に行け」といふ歌や「わが心はかの人のものなれ、わが心は

かの人のものなれ。」といふ歌をうたひました。

小さなジャンは姉とは氣性が違つてゐます。ジャンは他の事を考へてゐました。彼は活潑な子供です、ジャンはまだほんの子供ですが、年に似合はず元氣で、彼のやうに活潑な子供はどこにもありません。ジャンは轉ばないやうに片手で姉さんの前掛を掴み、片手で丈夫な若者のやうに鞭を振つてゐます。ジャンの家の馬方が馬を河へ水浴に連れて行つた歸りでもジャンのやうに鞭で強い音を出す事は出来ません。小さなジャンはぼんやりして物を考へるは嫌ひです。野の草花なんか眼もくれませぬ。ジャンは力の要る苦しい仕事の事を考へます。泥にはまり込んだ荷馬車や彼の聲と鞭に怖れて、嘶きながら駈け出す荷馬車の馬の事を考へます。

カタリーヌとジャンは丘へ登りました。そこからは樹木の間から覗いてゐる村の煙突や教會の尖つた屋根が見えます。そこでは世界がどんな

に廣く見えるでせう。カタリーヌはそこにあると教はつたいろくのお話——ノアの方舟の鳩や、天國のイスラエル人や、町から町へとお歩きになる基督などのお話が、一般によく解るやうな氣がします。

「坐りませう。」とカタリーヌは云ひました。

カタリーヌは坐つて、兩手を開いて、摘んだ花を膝の上に撒散らししました。彼女の身體は花のために好い香がします、すると、忽ち蝶が彼女の周圍へひら／＼と飛んで來ました。

カタリーヌは花を選つたり比べて見たりしました、花輪を編んだ、耳へそれを掛けたりしました、すると、カタリーヌは花の飾りで田舎の飼羊者が拜む聖母の像のやうになりました。その間に、弟のジャンは夢中で馬を走らせる事を考へてゐましたが、ふと姉さんの方を見ると、これはきれいだと感じました。ジャンは子供心に神様を拜むやうな氣になりました。ジャンは思はず手に持つてゐた鞭を落しました。姉さんは

美しい、きれいな花で埋められてゐると、ジャンは思ひました、で、その事を姉さんに云はうとしましたが、はつきり云ふ事が出来ないのです。しかし、カテリーヌはそれを察しました。小さなカテリーヌはジャンの大きい姉さんです、大きい姉さんは小さいお母さんです、小さいお母さんは弟の思つてゐる事をちやんと察する事が出来るのです。

「ジャン、姉さんはお前に美しい花輪と拵へてあげるんだよ、お前は小さな王様のやうに見えるだらうね。」とカテリーヌが云ひました。

そこで、カテリーヌは白い花や、黄ろい花や、赤い花を編み合せて飾圈を作りました。その飾圈をジャンの頭へ載せますと、ジャンは誇りと嬉しさに顔を赤くしました。カテリーヌは弟を接吻し、両手で高く差上げました、そして花で飾られた弟を大きな石の上へ上げました。カテリーヌは弟をほれなくと眺めました、弟が美しくなつたからです、そんなに美しくしたのは自分だからです。

ジャンは石の臺の上に立つて、自分は美しくなつたと思ひました、自分は偉くなつたと思ひました。ジャンは自分が神々しくなつたと思ひました。彼はちつと真直ぐに立ち、眼を圓くし、唇を結び、両手の掌を上にして腰に著け、車の輻のやうに指を開いて、嬉しさうに佛様になつたやうな顔をしてゐます——ジャンは本當に佛様になつたのです。頭の上には大空があり、足の下には森や島があります。ジャンはこの世界の中心です。彼だけが偉いのです、彼だけが美しいのです。

所が、その時突然、カテリーヌが笑ひ出しました。

「まア！ ジャン、お前の様子はなんて可笑しいんでせう！ なんて可笑しいんでせう！」とカテリーヌは叫びました。

カテリーヌはジャンの傍へ駆寄つて、彼に接吻し、彼の身體を振りました、重い花輪はジャンの鼻の上へたまり落ちました。と、カテリーヌは又笑ふのです。

「まア、お前の様子はなんて可笑しいんでせう、なんて可笑しいんでせう！」

しかし、ジャンは笑ふどころではありません。ジャンは悲しくなりました、もうきれいでなくなつたかと思うと悲しくなりました。もう飾は滅茶々々になつて、ジャンは佛様ではなくなつたのです。

花輪は壊れて草の上に散り、ジャンは又他の子供と同じやうになつてしまひました。もうきれいで何でもなくなつてしまひました。しかし、ジャンはやつぱり丈夫な腕白小僧でした。彼は直ぐ又鞭を握りました、そして六頭の馬を追つてゐる夢を見ました。カテリーヌはまだ花を翫弄にしてゐます。が、或る花はもう凋んでしまひました。或る花は花瓣を閉ぢて眠つてゐます。花も動物と同じやうに眠るのです、御覽なさい！一時間か二時間前に摘んだ風鈴草は、紫色の花弁を閉ぢ、カテリーヌの小さな掌の中で眠つてゐます。

微風が吹きました、カテリーヌは身顛ひしました。もう夕方です。

「お腹が空いた。」とジャンが云ひました。

しかし、カテリーヌは弟に與へる麵麩を持つてゐません。

「ジャン、お家へ歸りませう。」

二人は大きな爐の上へ鉤でぶら下つてゐる鍋の中でグツ／＼煮えてゐる玉菜のスープの事を考へました。カテリーヌは花を抱へ、片手でジャンを連れて、家の方へ歸つて行きました。

太陽は眞赤に西の空へそろ／＼沈まうとしてゐます。燕が翼を觸れひばかりに二人の傍を飛び過ぎました。だん／＼暗くなつて來ます。カテリーヌとジャンはひしと寄り添ひました。

カテリーヌは道に花を落しました。あたりが静かなので、蟋蟀が斷えず鳴いてゐるのが聞えます。二人は怖くなりました、悲しくなりました、子供心にも夕方は淋しいのです。あたりは二人のよく知つてゐる土地で

すが、その見馴れた土地が珍らしく、薄気味悪く見えるのです。地面が急に大きくなり、古くなつたやうに思はれます。二人は疲れました、お母さんがスープを拵らへて待つてゐる自分たちの家へはどうしても歸り著けないやうな気がします。ジャンの鞭はだらりと垂れ、カタリーヌは指が疲れたので一ばんお終ひに残つた花をも落してしまひました。カタリーヌはジャンの手を引張りました、二人とも口を利きませんでした。とう／＼二人は、遠方に自分の家の屋根と、暗い空に立上つてゐる煙とを見ました。そこで、二人は立止つて、手を握り合せて、嬉しさの餘り大きな聲を出しました。カタリーヌは、弟を接吻しました、そして二人は又もや疲れた足で走れるだけ早く走りました。村に歸ると、畠から歸つて来た女どもが二人に聲を掛けました。二人はやつと生返つたやうに思ひました。お母さんは白い帽子を冠り、手にスープの杓子を持つて、家の入口に立つてゐました。

「早くお歸り、早くお歸り！」とお母さんが云ひました。そこで、二人はお母さんの身體に抱きつきました。カタリーヌは玉菜のスープが卓子の上で蒸氣を立てゝゐる茶の間へ行くと、又もや身顛ひしました。カタリーヌは夜が地上に降りるのを見ました。ジャンはもう椅子に腰掛け、顎を卓子と同じ高さにして、スープを吸つてゐました。

スザンヌの智慧

皆さん御存知の通り、ルーヴルの博物館には、美しい物や古い物が保存されてゐます——これは本當に良い考です、何故といふに、古い時代と美とはいづれも尊むべきものだからです。ルーヴル博物館に保存されてゐる古い物の中で最も人が感心するのは一個の大理石の片です、その大理石の片は方々が缺け損じてゐますが、その上にある手に花を持つた二人の處女だけは今でもはつきり分ります。二人とも美しい姿をしてゐますが、希臘の若い時代にはこの二人の婦人も若かつたのです。その時代は完全な美の時代であつたと人は云ひます。この婦人の像を刻む彫刻家は二人の婦人に横を向かせてゐます、そして二人の婦人はお互ひ

に聖い花だといはれてゐる蓮の花を差出してゐます。學者はこの二人の處女に就いていろいろ考へました。學者は處女たちの事を探すために澤山の本——羊皮紙を綴じた大きな書物や、犢皮紙の大きな書物や、豕の糞皮で作つた書物などをひつくりかへして見るのですが、何故この美しい二人の處女が手に花を持つてゐるか分りません。

多勢の學者が日夜骨を折つて研究しても分らなかつた事を、スザンヌといふ女の兒は一秒時間で發見しました。

スザンヌのお父さんはルーヴル博物館に用事があつたので彼女を連れて行きました。スザンヌは古い物を珍らしげに眺めてゐましたが、腕や、足や、頭の缺けて無くなつた神様の像を見ると、獨言を言ひました、「あー さうだ、これは大人の玩具だわ、大人も子供と同じやうに玩具を壊すのねえ。」各自が花を持つてゐる二人の處女の所へ來ると、スザンヌは二人に接吻を送りました、二人が非常に美しく見えたからです。

ると、お父さんがスザンヌに尋ねました。

「何故あの人たちはお互ひに花を出してゐるんだらう？」

と、スザンヌは直ぐに答へました、

「お互ひに誕生日を祝つてゐるんですよ。」

それから、一寸考へて、スザンヌはかう云ひました。

「あの人たちは二人とも同じ日に生れたんですよ、二人ともよく似てゐるから、同じ花を舉げてゐるんですわ。女の兄のお友達はいつもお誕生日の日が同じだといふわね。」

今、スザンヌはルーヴル博物館や希臘の古い大理石からすつと離れた遠方にゐます、スザンヌは鳥や花の國にゐるのです。彼女は明け春の日を牧場の木蔭で送つてゐます。彼女は草原で遊んでゐます、夫は一番楽しい遊びです。スザンヌは、今日はお友達のジャック・クリューヌのお誕生日だといふ事を覚えてゐるので、ジャック・クリューヌにあげる花を摘んでゐるのです。

畫家

ミシエルのお父さんは畫家です。ミシエルはよくお父さんが畫架に向つてゐるのを見ます、お父さんが畫布の上に人間や動物の畫を立派に描いてゐるのを見ます、地面でも、海でも、空でも、その他どんなものでも自然のままの色に描けるのです。ミシエルはお父さんがよく好んで、眼や唇が恰も露のやうに見える女を描くのを見ました、色の白い口許で微笑んでゐる女を描くのを見ました。僕が大きくなつたら、女なんか畫かない、僕は馬を描くよ、馬の方が立派だからな、とミシエルは考へます。

ミシエルは今迄に何遍も、一ばん立派だと思ふ動物を描いて見ました。しかし、馬を描くと、それが少しも馬に似ないのです。ミシエルの描いた

馬は、まるで四本足の駝鳥です。全く、畫は六ヶ敷いものだ。

しかし、ミシエルは一生懸命で勉強しましたので、近頃では大分上達しました、彼の畫を見ると、何を描かうとしたのか、どうやら分るので、ミシエルは毎日畫を描きます。彼は勉強家で、仕事が好きですが、この二つは天才にはなくてはならぬものです。その上に時を待つのです、きつとミシエルも行末お父さんのやうな偉い畫家になるでせう。昨日、ミシエルは大版の紙に、杖をついて海岸を歩いてゐる紳士を描きました。手が胸から出てゐるやうに見えますが、それを除けては紳士は非常によく描けてゐます。紳士の上衣には四つ釦があります、この畫をもつと完全にするに、はどうしたらいいでせう？ 紳士の傍に一本の樹があります。遠方に小船があります。紳士は手でその樹を摘み上げやうとしてゐるやうに見えます、樹を吞まうとしてゐるやうに見えます、遠近法が正しくないのです。偉い畫家の畫にもこれと同じ缺點はあるものです。

今日、ミシエルはもつと大仕掛に畫を描き終へやうとしてゐます。人間と船、と、風車小舎を描いたのです。ミシエルはこの立派な畫の仕上げをしてゐます。彼は畫を眺めました、船は水の上を走つてゐるやうに見えます、風車は廻つてゐるやうに見えます。彼は自分が偉く思はれました。ミシエルは本當の藝術家のやうにこの畫によつて榮譽を得たのです。

所が、ミシエルは小猫が床で絲の毬に戯れてゐるのに氣がつかまませんでした。ミシエルが部屋を出て行くと、猫は卓子の上へ飛上つて、その白い前足で紙の上へインキ壺をひつくりかへしました。ミシエルの傑作はだいたしになつてしまひました。ミシエルは初めは悄氣しました。けれども、彼はやがて又傑作を描いて、小猫と悪い運命によつて自分に加へられた禍を幸福に變へるでせう。かくして天才が悪い運命に打勝つでせう。

犬と小娘

ジャックリンとシローは古いお友達です。ジャックリンは小さな女の兒で、シローは大きな犬です。彼等は同じ世の中へ生れて來ました、二人とも田舎で生れたのです、だから、お互ひに思ひ遣りがあるのです。彼等はどの位の以前からお互ひに知り合つてゐるのでせう？それは分りませんが、犬も覚えてゐないし、女の兒も覚えてゐないのです。それに、彼等はそれを知る必要もないのです、彼等はすべての事を知りたいと思ひませんし、知る必要もないのです。たゞ彼等はすつと以前から、世の初めからお友達だと思つてゐるだけです、自分たちの生れる前にも世界があつたとは彼等には考へられないのです。彼等の考へによると、世界は

自分たちと同じやうに若くて、單純で、無邪氣なのです。さういふ世界の真中で、ジャックリンはシローを見てゐるし、シローはジャックリンを見てゐるのです。

シローはジャックリンよりもすつと大きく強い。シローがジャックリンの肩に二本の前足を掛けると、彼の頭と胸はジャックリンの丈より高くなるのです。シローは三口でジャックリンを喰べてしまふ事が出来るのですが、彼はジャックリンが徳を持つてゐる事を知つてゐます、彼女は小さいけれども、貴いのだと思つてゐます。シローはジャックリンを良い女の兒だと思つてゐます、ジャックリンを愛してゐます。シローはジャックリンが可愛らしいので、その顔を舐めます。ジャックリンはこの犬が強くて親切だから彼を可愛がつてゐます。ジャックリンはシローを敬つてゐます。シローは彼女の知らないやうな多くの秘密を知つてゐるのです、シローの身體の中には地上の不思議な天才が潜でゐるやうに思はれるのです。



日本評論社出版部

世界童話傑作叢書

第四編

大正十年十一月十五日印刷
大正十年十一月二十日發行

畫蜂姫典附

【定價金壹圓七拾錢】

著者 福永挽歌

東京市本郷區弓町一丁目二十五番地

發行者 茅原茂

東京市神田區三河町一番地

印刷者 安藤金三郎

東京市本郷區弓町一丁目二十五番地

發行所 日本評論社出版部

電話小石川(一九七一)番
三六九五番
振替東京九六七八番

◇日本評論社圖書總目錄……往復ハガキにて御申越次第進呈

ジャックリンは、別の空の下に生きてゐた昔の人として、貴ぶべき田舎漢として、毛の生えた森や鳥の神様として、シローを尊んでゐます。所が、或る日、ジャックリンは、自分の敬つてゐる神様が、地上の天才が、毛の生えた神様が、長い革紐で井戸の傍の樹に繋がれてゐるのを見て、非常に驚きました。彼女は不思議さうに眺めました。シローはその正直な我慢強さうな眼でジャックリンを眺めました。シローは自分が毛の生えた神様である事を知りません、鎖に繋がれ頸輪をはめられても怒らないのです。しかし、ジャックリンは逡巡しました、近づく元気がないのです。神様のやうなお友達が鎖に繋がれてゐるのが、どういふわけか分からないので、ジャックリンは子供心に何となく悲しくなりました。

2-2127

世界童話傑作叢書

第一編	第二編	第三編
茶碗の一生	魚の舞踏	漁夫の指輪
譯永挽歌 定價壹圓 五拾錢送圓 料十三錢	譯永挽歌 定價壹圓 五拾錢送圓 料七錢	譯永挽歌 定價壹圓 五拾錢送圓 料七錢
<p>露國ウオルホーフスキー著、これは平凡なお伽噺ではない、子供ばかりが讀む童話でもない、書中の諸篇悉く無機物を假り來つて、悉く之れを人格化し、偉大なる或るものを含有せしめた民衆的藝術品である。</p>	<p>露國クロイロフ著、第一篇の「茶碗の一生」は世界的に何物かを憧憬する慧く鋭い高級な少年讀者を満足せしめたのみならず、新しい家庭の總ての人の大歡迎を受け、たの本篇に至つては更に深刻、更に清新、そして多作を受けなかつた、此の文豪の此の一篇は人々に絶する無價の寶玉の尊さがある。</p>	<p>瑞典セルマ・ラゲルロフ著、第一篇、第二篇は露西亞の童話で、今度は瑞典の代表的童話「漁夫の指環」外七篇を御紹介致します。北歐の、静かに、冷たく、神秘的な、譬へば、光の寶玉のやうな味ひのある此の名作は、有名な丁抹のアンデルセンの作よりもモツト美しく、モツト力があるのです。</p>

500

28